

2013 年度 国際協力実習

タイ

スタディツアー報告書



名古屋学院大学
外国語学部
国際文化協力学科

—— 報告書 目次 ——

1. スタディツアー概要 (1)

スタディツアーの目的、参加者名簿、お世話になった方々

2. 訪問先の記録 (5)

タイの観光と病気への対策

北タイの農村生活と LINK

Khon Kaen University

JICA in Thailand

青年海外協力隊

都市スラム問題とプラティープ財団

3. 参加者の感想 (19)

人見 泰弘 (Dr. Yasuhiro HITOMI)

長瀬 賢俊 (Mr. Masatoshi NAGASE)

浅井 夕貴 (Ms. Yuki ASAI)

長谷川 由奈 (Ms. Yuna HASEGAWA)

松井 文香 (Ms. Ayaka MATSUI)

泉 美憂 (Ms. Miyu IZUMI)

遠藤 奈々美 (Ms. Nanami ENDO)

熊谷 佳純 (Ms. Kasumi KUMAGAI)

黒川 さくら (Ms. Sakura KUROKAWA)

小林 千華 (Ms. Chika KOBAYASHI)

佐藤 杏樹 (Ms. Anju SATO)

清水 佳奈 (Ms. Kana SHIMIZU)

杉中 香月 (Ms. Katsuki SUGINAKA)

富田 愛弥 (Ms. Aya TOMIDA)

中林 由紀香 (Ms. Yukika NAKABAYASHI)

羽渕 由美子 (Ms. Yumiko HABUCHI)

平井 希歩 (Ms. Kiho HIRAI)

藤井 紗希 (Ms. Saki FUJII)

古谷 優衣 (Ms. Yui FURUTANI)

山口 莉穂 (Ms. Riho YAMAGUCHI)

4. 報告会などの資料 (63)

報告会チラシ、学習成果報告会、ギャラリー

1. スタディツアー概要



スタディツアーの目的

- ①学生が、タイの政治・経済・社会・文化・国際関係について説明できる。
- ②学生が、日本と異なる国の現状を理解し、国際社会を生きる「国際人」としての責任を考えることができる。

日付	内容	宿泊地
8月18日 日	<u>移動とミーティング</u> セントレア1100発・バンコク1500着(タイ航空TG645)、バンコク1720発・チェンマイ1830着(タイ航空TG116)。専用車でホテルへ。到着後にミーティング。	Chiang Mai Plaza Hotel
19日 月	<u>農村ホームステイ</u> 0730出発。移動(3時間)してホアファイ村到着。Link活動説明。午後よりディナープログラム。	ホアファイ村
20日 火	<u>農村ホームステイ</u> 終日、パカニョーの文化体験(お菓子作りと機織りなど)	ホアファイ村
21日 水	<u>ふりかえりとチェンマイ市内観光</u> ふりかえりの後。ホアファイ村を出発、移動(3時間)。午後にチェンマイ市内観光(三班に分散)	Chiang Mai Plaza Hotel
22日 木	<u>移動とミーティング</u> 専用車でチェンマイ空港へ(空港で昼食)。チェンマイ1230発・バンコク1340着(タイ航空TG107)、バンコク1440発・コンケン1535着(タイ航空TG42)。コンケン大学(KKU)TAと合流。	Kwanmor Hotel
23日 金	<u>コンケン大学訪問・アクティビティ</u> コンケン大学訪問(キャンパスツアー、学食体験、先輩インタビュー、KKUのTAとの交流など)	Kwanmor Hotel
24日 土	<u>コンケン大学生と市内観光</u> 終日、KKUのTAとともにショッピングセンターでフリータイム。	Kwanmor Hotel
25日 日	<u>移動とミーティング</u> 専用車で空港へ。コンケン1230発バンコク13:25着(タイ航空TG45)。空港から専用車でホテルへ。到着後にミーティング。	The Twin Towers Hotel Bangkok
26日 月	<u>JICA訪問・青年海外協力隊員との懇談、協力隊員活動視察</u> 0850JICA事務所着。協力隊事業の説明とグループごとに懇談。昼食後、協力隊活動現場へ移動。協力隊員活動現場の視察(日本語教師)。	The Twin Towers Hotel Bangkok
27日 火	<u>JICAプロジェクトの説明および視察</u> 0850JICA事務所着。人身取引プロジェクト専門家の講義と意見交換。昼食後、パクレット船着場へ移動し、ODA建設橋梁群の視察。	The Twin Towers Hotel Bangkok
28日 水	<u>プラティープ財団訪問および市内視察</u> 1000プラティープ財団着。活動説明、幼稚園での交流。午後にバンコク市内観光(ワットプラケーオなど)	The Twin Towers Hotel Bangkok
29日 木	<u>バンコク市内観光</u> 終日フリー。夕方ホテル集合。みんなで夕飯をとり、空港へ移動。00:05バンコク発(タイ航空TG644)	機内泊
30日 金	<u>帰国</u> 0800セントレア空港に着。解散。	

参加者名簿

期間：2013 年 8 月 18 日～8 月 30 日（13 日間）

参加学生：外国語学部 国際文化協力学科 18 名

二年：	浅井 夕貴	(Ms. Yuki ASAI)
	長谷川 由奈	(Ms. Yuna HASEGAWA)
	松井 文香	(Ms. Ayaka MATSUI)
一年：	泉 美憂	(Ms. Miyu IZUMI)
	遠藤 奈々美	(Ms. Nanami ENDO)
	熊谷 佳純	(Ms. Kasumi KUMAGAI)
	黒川 さくら	(Ms. Sakura KUROKAWA)
	小林 千華	(Ms. Chika KOBAYASHI)
	佐藤 杏樹	(Ms. Anju SATO)
	清水 佳奈	(Ms. Kana SHIMIZU)
	杉中 香月	(Ms. Katsuki SUGINAKA)
	富田 愛弥	(Ms. Aya TOMIDA)
	中林 由紀香	(Ms. Yukika NAKABAYASHI)
	羽渕 由美子	(Ms. Yumiko HABUCHI)
	平井 希歩	(Ms. Kiho HIRAI)
	藤井 紗希	(Ms. Saki FUJII)
	古谷 優衣	(Ms. Yui FURUTANI)
	山口 莉穂	(Ms. Riho YAMAGUCHI)

引率教職員：国際文化協力学科	人見 泰弘	(Dr. Yasuhiro HITOMI)
	石崎 程之	(Dr. Noriyuki ISHIZAKI)
国際センター	長瀬 賢俊	(Mr. Masatoshi NAGASE)

お世話になった方々

特定非営利活動法人 Link・森と水と人をつなぐ会

木村 茂さん、久留島 啓さん、Ruchira Sukwattanaphan さんとホアファイ村のみなさん

Khon Kaen University

Ratchanee Piyathamrongchai 先生、篠原 延明先生、高石 洋子先生、Phuwat Tha-inta 先生、人文社会学部日本語学科のみなさん

JICA タイ事務所

木下 康光次長ほか、JICA スタッフのみなさん

青年海外協力隊（Japan Overseas Cooperation Volunteers）

浦川 純子さん、川副 泰祐さん、栗原 直子さん、本間 洋平さん、大石 忍さんとタマサートクロンルアン ウィッタヤーコム中高校のみなさん

三井住友建設株式会社

山田 征史さんと三井住友建設株式会社のスタッフのみなさん

プラティーブ財団（Duang Prateep Foundation）

プラティーブ・ウンソンタム・秦先生、ラダパン・プレスリトーンさんとプラティーブ財団のみなさん



2. 訪問先の記録



タイの観光と病気への対策

小林 千華 (Chika KOBAYASHI)

佐藤 杏樹 (Anju SATO)

古谷 優衣 (Yui FURUTANI)

チェンマイ

チェンマイ、そこは観光地ランキング2位というほど人気の町である。市内の様子は光り輝く大きなショッピングセンターがある反面、日本ではあまり見かけられない古風な路地もあった。夜になるとナイトバザールという日本のお祭りのように屋台が町に立ち並ぶ。現地の方が買い物をしている様子はあまり見られず、観光客ばかりである。しかし、立ち並ぶナイトバザールでは観光客向けの商品が多く、どれも引き寄せられる品ばかりであった。金曜の夜、土曜日曜は決まったようにみんなが集まり市場を盛り上げる。お土産にぴったりのタイ雑貨や、ビンテージの洋服や食器などを並べるお店が多くある。さらに、ナイトバザールで人気なのが、野外でいい香りのする食べ物の豊富さである。また、ショッピングだけでなく有名な寺院も多くある。

チェンマイには日本から出発し、1日目に到着した。チェンマイでの市内観光は2泊3日のホームステイが終了してからの4日目である。1日という短い時間での市内観光であったため、すべての有名な寺院を訪れることは出来なかったが、私たち18名は3つのグループに分かれてそれぞれ寺院を訪れた。

あるグループが訪れた寺院は、旧市街地の北西にそびえる標高1080メートルの「ワット・プラ・ターイ・ドイ・ステープ」という寺院である。チェンマイ市街を一望できる展望台にもなっていることから、この寺院への参拝をなくしてはチェンマイを訪れたことにならない、とさえ言われている。

バンコク

スタディツアーの終盤で訪れたのは、タイの首都であるバンコクだ。バンコクの街並みは非常に都会的で、高層ビルや綺麗なデパートが立ち並ぶ。多くの外国人観光客が行きかい、道路にはたくさんの車やトゥクトゥクが走る。その光景は、日本の東京を想像させる。トゥクトゥクは、他の観光地のものよりも派手な外装をしており、夜になるとライトを灯してとても煌びやかに走る。バンコクの交通は非常に混雑しているのだが、トゥクトゥクは速度がとても速く、運転が荒いことが多いので、少し恐怖心を抱く。日本では絶対に体験できないものなのでオススメです。しかし、安全面を考えるとタクシーのほうが良いと聞いた。

バンコクで私たちは王宮周辺の寺院を訪れた。寺院はとても広く、敷地内には多くの

建造物が見受けられた。その中にある、ワット・ポーという寺院の中には巨大な涅槃像がある。全長 46 メートル、高さ 15 メートルで、全身が金箔で覆われている。多くの観光客がカメラを向けていた。寺院内の建造物は日本のものに比べるとどれも派手な外装をしており、デザインが細かく芸術的である。

バンコクは夜になっても静まることはなく、道には多くの屋台も立ち並ぶ。高層ビルの展望台から見渡す夜景は本当に綺麗で、その光でバンコクの賑やかさは一層伝わる。多くの物や人が集まる、活気ある街、バンコクであった。

タイでの病気と対策について

タイでは蚊による病気が流行している。その中の一つに「マラリア」や「デング熱」というものがある。マラリアは高熱にうなされデング熱は血小板が減少する病気だ。実際そのような病気にかからないよう、私たちは蚊の予防策として、蚊よけを携帯した。また、農村ホームステイでは家が隙間だらけで蚊や虫が入り込めるため、「蚊帳」をつけて睡眠をとった。蚊帳とは上から網をつるして外部からの虫の侵入を妨げるというものだ。スタディツアーに行く前までは「農村が一番蚊の多く危ないところ」だと考えていたが、実際にタイへ行ってみると、農村は私たちがタイへ行った場所の中で一番蚊が少なかった。一番蚊が多かったのは「コンケン」だった。私たちがコンケンへ行ったときは蚊が大量発生しており、「あり」もたくさん寮に入り込んでいた。コンケンは一歩外に出るだけで何ヶ所か刺され、虫よけをぬってもあまり効果はなかった。

また、狂犬病という病気もタイには存在する。狂犬病とは、犬や動物にかまれると 24 時間以内に狂犬病のワクチンを数回に分けて打たなければならない。発症したら 100%死ぬ。タイは比較的大きい犬が多く、かなりの威圧感があったように思えた。特に農村の犬はほかの地域と同様に大きな犬が多かった。また犬は玄関に常におり、よく吠えるし、襲ってきそうになるのでかなり怖かった。また、スラム街の犬はかなりやせ細っており、細い路地はかなり大きい犬がたくさんいたので、とても警戒した。タイへ行って身の危険を感じたことのひとつだ。事前に病気のことをたくさん調べた甲斐があり、今回のスタディツアーは皆安全に帰ってくることができた。



チェンマイのナイトバザールにて



バンコク・ワットポーの涅槃像

北タイの農村生活と LINK

浅井 夕貴 (Yuki ASAI)

長谷川 由奈 (Yuna HASEGAWA)

松井 文香 (Ayaka MATSUI)

私たちは、今回ホアファイ村へ訪れた。その目的は、北タイには森林伐採という問題があるが実際どのようなことが起こっていたり、問題となっているのかを知るためと、NPO 団体の LINK がどのような団体であり、その活動内容を知るためである。

私たちが訪問したホアファイ村へは、首都バンコクから約 1 時間かけてチェンマイへ行き、そこから約 2 時間かけて行くという行き方であったが、そこまでの道は私たちが想像していた以上に整備されていた。ホアファイ村には、「ホアファイ集落」「ホイボン集落」「メーファンルアン集落」「デンディン集落」という異なる 4 つの集落があり、私たちはその中の「ホアファイ集落」と「ホイボン集落」を訪れた。

一日目

ホアファイ村に到着した 1 日目、ホアファイ集落で 3 つのグループに分かれ食材をとりに行き、夕食を作った。その過程では、村の人と雨の中滑りやすい状況で筍を山の中で採ってきたものを鉋でむいたり、生きている鶏をハンガーのようなもので首をしめて殺し、熱湯にいれて羽や毛をむしり食材として使うなどと、自らの手で食材を用意し調理していった。出来上がった料理の 8 割以上が辛いものであり、私たち日本人は水がなくては食べられなかった。しかし、村の人たちは私たちが好む辛さでは足りずに、自ら調味料も作っていた。また、村によって米は異なり、一般的に手で食べる。



ホアファイ村での昼食



夕食作り（ディナープログラム）

夕食後、ホイボン集落へ移動し、各家に 1～2 人に分かれてホームステイを経験した。そこでは、トイレやお風呂は家の外にあるのが一般的である。トイレについては紙がな

いため、各自で持参したものを使い持ち帰り、横に置いてある桶で水をすくって流した。お風呂については、シャワーもしくはホースを使用し、水のみで体を洗った。

また夜には、蚊によるマラリア、デング熱等の病気対策のために、ホームステイ先の方があらかじめ用意してくださった蚊帳の中に入って睡眠をとった。

農村では、豚や鶏を自ら育てて食べているようで、朝方にはそれらの鳴き声によって目がさめることが普通であった。他にも、村のあちらこちらで犬やネズミなどが走り回っていて、ホームステイ先で出していただいた料理の中にネズミが丸ごとはいっていたこともあった。

二日目

翌日は、村の人たちと「機織り」「精米作業」「餅つき」「北タイ伝統のお菓子作り」を行った。まず、餅つきでは日本では餅をつく時に水を使いつきやすくするが、北タイでは黒ゴマを使っていた。そのため、終了後には餅が黒くなっていた。伝統のお菓子作りでは、山からバナナの葉っぱを採りに行き、その葉で男包み、女包みを葉で作ってその中に米を入れて茹でて完成。このお菓子はとても美味しかった。昔は儀礼などに使っていたそうだが、現在ではあまりこのお菓子を作る人も少なくなっている。そこで、LINKが伝統を守るために、復活させた。機織りは、細かく集中力を伴う作業であるため、普段あまりこういった作業をすることがない私たちにとっては、しばしば辛さを感じながらの作業であった。

LINK と農村の関わり

このように、伝統文化を守りながら自給自足をし、自然と共に生活をしている人たちにとって、森は彼らのスーパーマーケットであり、生きていくために必要不可欠な存在となっている。しかしながら、過去の森林伐採により政府が森を固有化し、使えないようにしてしまったことがあり、その時村人たちは国から森を取り戻すために立ちあがった。そして、その村人たちをサポートするのが LINK の活動である。森を取り戻すためには、村の詳細を国へ提出しなければならず、LINK は主にこの村の情報を村人と一緒に調査をしている。そのおかげで現在、彼らはこの生活を続けていくことができている。しかし、その一方では森林を固有化したことをいいことに、森の奥で政府が木を切り売っているそうである。

Khon Kaen University

清水 佳奈 (Kana SHIMIZU)

杉中 香月 (Katsuki SUGINAKA)

平井 希歩 (Kiho HIRAI)

コンケン大学の訪問

今回訪問したコンケン大学は、タイ東北地方で有名な大学である。コンケン大学のあるコンケン県は首都バンコクから約400キロの位置にあり、バンコクからバスで5時間、飛行機だと1時間半ほどで着く。コンケン県は比較的雨が少なく、私たちが訪問した8月は昼30℃～40℃、夜25℃くらいだった。8月は雨期のため、1日中曇っており、夏にしては、過ごしやすい気候だった。

コンケン大学は名古屋学院大学と協定校であり、タイの学生と交流するために訪問した。大学内は一つの町のように、病院、ガソリンスタンド、ホテル、ショッピングセンターなどがある。コンケン大学は17学部および大学院を有する総合大学である。学部ごとに校舎があり、それぞれの学部に学食またはカフェテリアもある。学内があまりに広いので、大学内の移動手段は、ほとんどの人がバイクである。しかし、タイの人は何歳からバイクに乗っていいのか明確に分かっていないようだった。バイクの他に大学内を走る無料のバスまたはソンテオがあり、これらを利用している生徒も多い。

コンケン大学に到着し、まず日本人2人、タイ人2人の4人グループになってコンケン大学の敷地内を案内していただいた。私たちは、農業学部が育てている動物を見学、ナイトマーケットへ連れていってもらった。ナイトマーケットとは、食べ物の屋台や衣料品などが並ぶ夜の市場である。日本では、お祭りの時しか見ることができない風景だった。

このマーケットは、ほぼ毎日17時頃から開かれている。しかし、学生の人はいあまり行かないそうだ。ナイトマーケットにある商品は日本人からするととても安く、服は200バーツ（日本円で600円）くらいが多かった。



コンケン大学正門

学生との交流

二日目にコンケン大学の学生とゲームをして交流した。交流内容は、「タイ」というキーワードで、思いつくことを大きな白い紙に字や絵でかき寄せた。一番多かった意見が、お坊さん・お寺・ゲイだった。続いて逆に「日本」というキーワードで思いつくことをかき寄せた。一番多かった意見が桜・侍だった。この交流会で自分が思っていたタイの印象とまた違うタイを知ることができた。そして、私たちが日本の文化をタイの人たちに教えるのではなく、タイの人たちに自分たちが知らない日本について気付かされる時間でもあった。

日本語学科

コンケン大学滞在中、一緒に交流し、お世話になった学生は人文社会学部日本語学科の生徒たちだ。人文社会学部は日本語、英語、スペイン語、中国語、フランス語、タイ語、社会学科に分かれており、約5000人の生徒が在籍している。日本語学科は学部の中でも難しく、日々勉強に励んでいる。ほとんどの生徒が高校の時から日本語を勉強しており、日本語がうまかった。授業は日本語で私たちが習っている英語と同じような授業内容だ。4年生になると通訳、ガイド、ビジネスに使われる日本語を勉強している。

日本語教員

コンケン大学で日本語教員として働いている日本人の方々に話を聞いた。コンケン大学に来て6年目の篠原先生は、学生ツアー海外旅行にタイへ行った時、タイの文化に興味を持ったそうだ。高石先生は名古屋学院大学英米学科を卒業し、3ヶ月の間 TA (teaching assistant) として勉強し、バンコクで英語と日本語の通訳として働いた後、去年からコンケン大学で働いている。コンケン大学の募集状況は日本からでも知ることができ、日本村というサイト、日本語教師の集いなどで募集を見ることができる。



コンケン大学の学生と記念写真

JICA in Thailand

黒川 さくら (Sakura KUROKAWA)

羽渕 由美子 (Yumiko HABUCHI)

山口 莉穂 (Riho YAMAGUCHI)

ODA（政府開発援助）と JICA（国際開発機構）の関係

日本は 1954 年以来、ODA として、開発途上国に資金的・技術的な協力をしてきた。そのなかで JICA は、世界最大規模の二国間援助を担う機関であり、世界 150 以上もの国と地域で事業を展開している。JICA は ODA の活動の一部を担っている。それが、技術協力・有償資金協力（円借款）・無償資金協力なのだ。

現在、発展が急激に進んでいるタイでは、技術協力を中心に有償資金協力を行っている。無償資金協力は現在行っていないそうだ。そこで技術協力として、JICA のスタッフの方から人身売買のお話を伺い、有償資金協力として、三井住友建設の方から橋の建設についてお話を伺った。

技術協力・・・人身売買について



JICA オフィスでの説明会

人身売買とは、人間が違法に売買されることで、タイの送り出し国に日本や欧米などの先進国が関わっている。国際的にも重要視されている問題なのだ。そこで、1 日目の JICA 訪問ではタイの人身売買の現状や日本や世界とのつながりについて伺ってきた。

タイにおける人身売買で多いのは、強制労働・性的労働・家事使用人・物乞いである。被害者は、紛争地域や、国籍を持たない人、少数民族の住む地域、また、政府の腐敗や法律がきちんと施行していないところなど、人身取引斡旋業者が活動しやすい地域で多く発生している。今回は特に、性的搾取被害者について詳しく伺った。かれらの多くは、騙された自分が悪いと自分を責め、被害者である認識をしていなかったり、周りに知られたくないために名乗り出ないのだと言う。また、精神的後遺症（PTSD）や社会からの偏見に苦しんでおり、生活再建に多種多様な支援が求められている。

そこで、JICA は彼らを支援している組織の能力向上のためにさまざまな知識や技術を教え、機能強化や関係機関との調整役を担うケースマネジャーの育成などを行っている。

今もなお人身売買は行われている。親が被害者であるとその子どもも親と同じく被害者になることが多く、人身売買の影響は次世代にも再生産される危険が大きい問題だ。この負の連鎖を断ち切ることも大きな課題となっている。

わたしたちは、これらの背景を理解し、国際的問題であるという認識を深める必要があるのだ。

有償資金協力・・・橋の建設について

タイの急激な発展に伴い、車の量が増えるも道路の設置が追い付かず、深刻な渋滞問題が発生した。そこで有償資金協力では資金を低い金利で貸し、渋滞緩和を目的とする橋を建設している。2 日目の JICA 訪問では、円借款によってチャオプラヤ川に架けられた橋にどう日本の企業関わっているのか、その橋がどのように造られたのかななどを三井住友建設の方に説明していただきながら、川下りをした。

多くの日本の企業がこのような橋を建設し、なかには、日本の技術が必要な橋の建設も行っていた。これらのおかげで、運送がスムーズになり、実際にインフラにも効果が出ているようだ。

他にも、今回利用したバンコクにあるスワンナプーム空港や都市交通である鉄道など有償資金協力によって造られたものだ。



船に乗って川下り(橋の見学)

このように JICA は多くのものを建設し、多くの技術を伝え、タイがよりよい生活を送れるよう活動している。

青年海外協力隊

泉 美憂 (Miyu IZUMI)

遠藤 奈々美 (Nanami ENDO)

熊谷 佳純 (Kasumi KUMAGAI)

私たちは、実際に日本人が海外で、どのように活躍しているのか知るために青年海外協力隊を派遣する独立行政法人国際協力機構（JICA）を訪問した。そして、実際にタイで働いている現役の協力隊員に話を伺った。

青年海外協力隊制度

JICA が実施する 2 年間の海外ボランティアとして開発途上国へ派遣する制度である。参加条件は日本国籍を持つ人、満 20~39 歳までの人、心身ともに健康な人、責任感・積極感、忍耐力を持つ人、現地の人々を尊重しながら協力活動を行う謙虚さなどが求められる。職種は 6 部門の中に 120 以上のものがあり、派遣国先も 80 ヶ国ある。

浦川純子隊員

彼女はノンタブリー県、クレッタカン女性保護・職業開発センターで青少年活動をしている。主に人身取引被害にあった女性を保護している。勉強を教えたり、ヘルスケアをして被害にあった女性たちを家へ帰す仕事だ。今後は識字教育が彼女にとって課題だそうだ。保護した女性は元々住んでいた場所へ帰るが、中にはまた女性保護センターに帰ってくる人もいる。浦川隊員は、そのような人たちの世話をし、また精神状態の回復にとりくんでいる。



川副泰祐隊員

彼はパトゥムターニー県、労災リハビリテーションセンターで作業療法士として活躍している。災害時に被害にあつて体が思うように動かない人（障がい者）の日常的動作の手助けや、基本的な行動の回復に努めている。30 年前に JICA 無

償資金協力によって建てられ、義肢や装具も設置してある。元々国際協力に関心があり、自衛隊をやめて理学療法士の免許を取得し、現在に至る。

本間洋平隊員

彼は、チャチェンサオ県、テパラート町役場でコミュニティ開発をしている。彼は日本の飲食系企業に務めており、タイに進出するために現地に滞在している。仕事内容はパッケージデザインや和食指導などがある。活動内容は、市場調査を行い、情報の共有、人事アドバイス、実行（活動）、そしてこれらの週刊報告となっている。参加したきっかけは、社内メールで参加募集からだそう。彼はこの仕事を通して企業と自分がともに成長できることを願っている。



栗原直子隊員

彼女はバンコクの泰日工業大学で図書館司書として働いている。生徒に日本語を教えたり、図書館を多くの人に利用してもらえるように本の並べ方などを直している。他にも授業やクラブ活動もしている。元々親の影響で小学校のときから JICA に興味があった。大学卒業後に、小学校教諭と図書館司書の免許を取り約7年間働いていた。その後 JICA の試験を受けて無事に合格し、現在に至る。



ウィットヤーコム中高校訪問

私たちは実際に協力隊の方が日本語教師として活躍している、パトゥムターニー県タマサートクロンルアンウィットヤーコム中高校を訪問した。現地の生徒たちは盛大に私たちを歓迎してくれた。ソーラン節やキムというタイの伝統的な楽器を披露してくれた。さらに現地の学生と一緒にプラータビアンを作った。プラータビアンとは、昔からある伝統的なおもちゃであり、葉の色が緑から茶色になるまで飾ってお



くおもちゃだ。まだ高校生にも関わらずしっかり日本語で説明していたので、この日のために一生懸命覚えてくれたことが分かった。生徒の多数が日本が好きで日本語の勉強をしていた。

学んだこと

私たちは4人の協力隊の人の話を聞き、職種もさまざまであれば応募動機もたくさんあることを知った。あらゆるところに協力隊になれるチャンスがあり、自分たちにも協力隊になる人が出てくるかもしれない。今回4人の話を伺い、青年海外協力隊とは案外身近にあるもので、将来私たちも協力隊になれる希望が見えた。そして、4人の充実している話を聞き、スタディツアー参加前よりも青年海外協力隊およびJICAに興味を持つことができた。

都市スラム問題とプラティープ財団

富田 愛弥 (Aya TOMIDA)

中林 由紀香 (Yukika NAKABAYASHI)

藤井 紗希 (Saki FUJII)

私たちはバンコクにあるクロントイスラムを訪れ、そこで行われているプラティープ財団の活動について話をうかがってきた。裕福で贅沢な生活を暮らしをしている日本と貧困問題に取り組んでいるプラティープ財団の現場を自分の目で見て国際協力のあり方を学び、私たち学生が、国際人としてできることを考えることが訪問の目的である。スラムは自分たちが想像していたものより、とても深刻であった。

クロントイスラム

私たちが訪れたクロントイスラムは、東南アジア最大のスラムである。第二次世界大戦後にクロントイ港で働く人が増えて次第にその周辺に住むようになったことが、スラムができたきっかけである。今では約 2 万世帯、約 10 万人が住んでいて、タイ内でも 2000 箇所以上のスラムがある。

スラム問題

安定な職についていないと住民登録ができないため、多くの人が登録しないまま生活している。現在のスラム人口が正確に分からないため、大まかな人口しか分らないことが問題となっている。また他には、ここ 10 年で肺炎、デング熱、背中が固くなる病気が流行っている。その原因はカンボジア・ミャンマーからの人口流入が関係しているのではないかと考えている。

ごみ問題

スラム内は、いたるところゴミだらけだった。匂いがすごく、生ごみをそのまま放置しておくため住民内で揉め事が起こることもある。ゴミの収集はバンコクから 1 週間に 1 回ある。



スラム内の様子

ドゥアン・プラティープ財団への訪問

クロントイスラムで活動するプラティープ財団を訪問した。この財団は1968年にプラティープ・ウンソンタム・秦さんが、お金がなくて学校に通えず、字が読めない子供たちを助けるために開いた「1日1バーツ学校」から始まった。1978年8月31日に現在のドゥアン・プラティープ（希望の灯）財団となった。

活動内容

プラティープ財団の活動は、次の4つに分かれている。

1. 教育推進活動：教育里親制度・芸術プロジェクト・難聴児教育
2. スラム地域開発事業：クロントイ信用組合・高齢者プロジェクト
3. 人材育成事業：青少年育成プロジェクト・エイズ予防対策
4. 緊急支援事業：クロントイ消防隊・津波プロジェクト

今回はドゥアン・プラティープ財団の隣にある幼稚園を訪問してきた。年少・年中・年長の3クラスにわかれていて1クラス約15人ほどだった。子供たちとサッカー・折り紙・シャボン玉などで交流した。

スラムの子供たち

クロントイスラムでは、麻薬が出回っていて、また2人に1人が学校に通っていないのが現状である。また、スラム内では裸足の子供を多く見かけ、とても危険だった。就職活動への影響もあり、出身欄にクロントイスラムと書くだけで、落とされることもある。貧富の差があるのだと感じた。

今私たちができること

ドゥアン・プラティープ財団のこと、スラムの深刻さを周りに伝えたり、勉強道具など今自分が使っていないものを送ることである（送料がかかってしまうため、現地に行って直に渡すのが一番である）。



幼稚園の子供たちとの交流

3. 参加者の感想



スタディツアー引率を終えて

引率教員 人見 泰弘 (Yasuhiro HITOMI)

今回、初めてスタディツアーの企画および引率業務を担当した。プログラム作りは手探りのなかで進み、正直に言えば不安もあった。出発の二日前、引率予定の石崎教員が急きょ参加できなくなり、出発前日はあまり眠れなかったことをよく覚えている。

それでも、いざスタディツアーが始まると、日に日に異国での生活に慣れていく学生に驚かされることになった。タイ訪問前に実施した事前学習の際には、やや心配なところがあったものの、しだいに教室では見かけないアクティブな顔が見えるようになっていった。13 日間のなかで、日々変わっていく学生を見ていくことは正直に言って楽しかった。

一方で、安全管理の面では反省もあった。引率中、私を含めて数人の学生が体調を崩した。体力的に疲れがたまる中盤以降のことでもあり、ツアー中の体調管理の徹底は課題となった。また 18 名の学生を都市部で引率するとき、はぐれて迷子になる可能性もあった。タイは車優先社会でもあり、歩いて移動するときには周囲を見渡すなど注意も必要となる。こうした現地の生活事情を学生が事前に意識できるプログラムの開発が今後の取り組みとして残った。

スタディツアーを終えた今、この体験をどのように次のステップへとつなげていくのかが問われるのだと思う。学生には、今回の経験が何かしらの「自信」になってくれたと信じている。そして、彼女たちに日頃から接する教員として、そのステップアップを支えていくようなかわりが求められるのだと思う。



自然に囲まれたホアファイ村



村人に教わりながらの夕食作り

今回、スタディツアーが実施できたのは、なによりも私たちを受け入れて下さった訪問先の方々の協力のおかげです。Link の木村さん、久留島さん、タイさんほかホアファ

イ村のみなさん。コンケン大学のラッチャニー先生、篠原先生、高石先生、プーワット先生とコンケン大学のみなさん。JICA タイ事務所の木下次長とスタッフのみなさん、青年海外協力隊のみなさん。三井住友建設株式会社の山田さんとスタッフのみなさん。プラティープ財団のプラティープ・ウンソンタム・秦先生と財団スタッフのみなさん。少々「やんちゃな」学生を受け入れて頂き、ほんとうにありがとうございました。タイで大きな経験を積み、18人は帰国後もみんな元気に生活しています。

また、国際センターの長瀬さん。今回は引率に同行してもらい、本当に助かりました。私自身が食あたりとなるなど学生なみに迷惑をかけましたが、全員が元気に帰国できたのは長瀬さんのおかげです。ありがとうございました。

リハビリ中の石崎先生には、一日も早い回復を。出発前、スタディツアーの打合せでは何度もご心配をおかけしましたが、学生は全員、無事に帰ってくることができました。先生、今度は一緒に東ティモールに行きましょう。



コンケン大学生とのワールドカフェ



プラティープ財団幼稚園にて

最後に、スタディツアーに参加した浅井さん、長谷川さん、松井さん、泉さん、遠藤さん、熊谷さん、黒川さん、小林さん、佐藤さん、清水さん、杉中さん、富田さん、中林さん、羽渕さん、平井さん、藤井さん、古谷さん、山口さん。現地滞在中は、日に日に「たくましく」なっていくみなさんに圧倒されることもありましたが、帰国後も元気に生活しているのを見て安心しています。みなさんが13日間を通して何かを持ち帰ってくれたならば、このプログラムは成功です。

I really appreciate you for accepting us and providing us with valuable opportunities. Thanks to the cooperation of many people in Thailand, we successfully completed the study tour. We wish for our students to develop from their own experience.

Yasuhiro HITOMI
Nagoya Gakuin University

2 週間のタイ・スタディツアーを終えて

国際センター職員 長瀬 賢俊（Masatoshi NAGASE）

「微笑みの国」と称されるタイは、出会う人の多くが私たちを笑顔で迎えてくれる。行き交う人全ての方がホスピタリティにあふれ、いい人ばかりというわけではないが、帰国後に何か心に温かさが残り、彼らの笑顔を思い出すことができる。なんとなく心が優しくなるような、そんな国がタイではないかと思う。そして、表面的な優しさだけでなく、他者への気遣いや「個」ではなく「輪」を大事にするタイの文化は、私たち日本人に、アジアにおける日本の立場や日本人としてのアイデンティティを再考するきっかけを与えてくれるのではないかと考えている。

名古屋学院大学は、開学当初より国際交流に注力しており、協定を結んでいる大学は世界 11 カ国に約 80 大学、中期・長期交換留学および短期留学プログラムを通じ、年間約 300 名の学生を海外に派遣している。また昨今は「机上の学習」のみでなく、現地を訪れ、自分の目で見て、耳で確かめ、深く国際社会を理解する「現場の学習」としてのスタディツアーを実施している。本学の国際文化協力学科では、スタディツアーを中心とした通年の正課科目を設置しており、今年度はタイの 3 都市、チェンマイ、コンケン、バンコクを訪問するスタディツアーを実施した。私は引率者の一人として、主にこのプログラムを無事に実施する為のサポート役として参加した。



チェンマイのワット・チェン・マンにて



チェンマイにて象のショー

例年、このスタディツアーでは国際協力の最前線で活躍する NGO・NPO や JICA 等の政府系機関、ODA による活動現場、財団や大学などを訪問しており、今年度は初めての取り組みとしてチェンマイの山岳民族の村、ホアファイ村でのファームステイを行程に組み込んだ。タイの多数ある山岳民族は、経済格差や人種差別、森林破壊、人身売買、言語、宗教、薬物など多くの問題を抱えていると言われている。ホアファイ村もそ

の例外ではなく、多くの問題を抱えていた村だったが、現在は「NPO 法人 Link・森と水と人をつなぐ会」の様々な支援により、村おこしの「モデル村」となった村である。このホアファイ村での体験は、山岳民族の置かれている状況や問題、森林保護の重要性、教育の必要性、そして自分たちに何ができるのかという事を自分の視点から考えるきっかけとなり、多くの学生にとってインパクトのある、心に残る経験となった。

今回、私は引率者という立場であると共に国際センター職員であったで、滞在中は何よりも参加学生の健康面に気を配っていた。特に前半のファームステイでは、慣れない生活によるストレス等で、学生達は彼女らの気づかない所で体力を消耗させていた。実際、コンケンに移動してから数名が体調不良を訴え、病院へ行くこととなった（幸い大事には至らなかった）。コンケンでは協定校の一つであるコンケン大学を訪問したのだが、ここはタイ国立大学の一つであり、特に医学部が有名な大学である。医学部だけでなく、看護学部、薬学部、理学療法学部などの学部も設置されており、総合病院もキャンパス内にある。十分に医療体制が整っており、安心して滞在することができた。



バンコクのタマサート高校にて



アナンタ・サマーコム宮殿で記念撮影

今回このスタディツアーを実施するにあたり、多く方からのご支援・ご協力を頂いた。特に NPO 法人 Link、コンケン大学人文社会学科の先生方、そして JICA の方々やプラティープ財団、ODA で建設された橋梁群を紹介頂いた三井住友建設の方々のサポートがなければ、無事に本プログラムを実施し、貴重な経験をする事は出来なかった。改めて感謝の意を述べたいと思う。

Thank you so much for providing us with this valuable opportunity in Thailand. During our 2-week study tour, there were no troubles or concerns. This was because many organizations and universities in Thailand supported this program. I really appreciate this great support.

ขอบคุณ มาก ครับ/ค่ะ!

Masatoshi NAGASE
International Center
Nagoya Gakuin University

タイを訪問して

浅井 夕貴 (Yuki ASAI)

初めての長旅

私は長い休みは毎年なにか物足りなく感じていて、なにか自分を変えてくれる刺激的なことはないかと思っていた中で、このスタディツアーのパンフレットと出会い、行こうと思った。ツアーに参加するには大きな費用が必要であったが、一度やりたいと決めたことは曲げないという頑固な所があるので、アルバイトをし、参加することが出来た。

一・二年生全員女子で、普段話したことがない学生と2週間過ごしたが、仲良く生活することが出来た。考えがぶつかることもあったが、一人一人の思考など聞く中で、仲間から得るものもたくさんあり、色々な視点から物事を見ることが出来た。また、協調性も身につくことが出来た。

説明会で先生から病気の話やご飯の話を聞き、楽しみより不安のほうが大きくなってきたのであったが、実際はそうでもなく、なに不自由なく生活することが出来た。

農村ホームステイ

2週間の中で一番印象に残ったのが農村での生活であった。

プログラムの中で一番初めの訪問先であり、一番ハードで濃い内容のものであった。言葉や文化が異なるのに、自分の最大限のタイ語やボディーランゲージを使うことで相手に気持ちが伝わり、理解してくれた時には、すごくうれしかった。タイ語を勉強していかなかったことで、結果的に今回このように得るものがあったのかもしれない。

ホームステイ先でタイ語で話すテレビを見ていたが、言葉がわからなかった。だが、身振りなどを見ているとどんな内容なのか分かる部分があり、ホームステイ先の女の子と笑う場面が同じであったりと、言葉を越えて伝わる大切なものがあるのだと思った。

農村生活は、何から何まで自給自足の生活だった。その大変な環境で生活する中で、普段どれだけ裕福な生活を送っているのかと痛感した。

大きな葉っぱを雨具にし、また食材となるフルーツや葉っぱを調達し、調理をし、食べるという普段は絶対に出来ない貴重な体験をすることが出来た。

おいしいご飯を食べられること、学校に行くことの出来る環境に感謝しながら生活していこうと改めて思った。

村の人々は誰もがみんなに優しく、気配りが出来る人間であって、仲間思いであり、私まで優しい気持ちになることが出来た。このようなことは簡単に出来ることではなく、人間として手本にしたい人物であると思った。

ツアーを通して

文化が違くと生活様式が変わる中で初めは慣れるまで時間がかかり、「大変だな…」と感じることが多々あった。それでも、最後には楽しかった思い出しかでてこないのだ。タイの現状を見て自分の考えが大きく変わったが、それ以上に何事も挑戦しようという気持ちが湧いてきたのである。このスタディツアーは私にとって意味があったのだ。

次はタイ語・英語を勉強してから一人でタイに行こうと思う。



This was my first time going to Thailand. I had fun during those two weeks. It was a short trip, but still a fun one. Thailand is nice and full of beautiful scenery. I made friends there and learned a lot, which became a precious experience for me. I am still in contact with my Thailand friends. Given the chance, I'd like to go there again. This is a memory that I will not forget for the rest of my life.

スタディツアー

長谷川 由奈 (Yuna HASEGAWA)

今まで、友達が海外に行ってみて考え方が変わったと言っていたのに対して、私は、行ってみても、衝撃を受けることはないであろうと思っていた。しかし、実際タイに行ってみて、私はしっかり衝撃を受けて帰ってきた。

私たちは、事前学習でNGO団体LINKについて調べていた。そして実際に、LINKの方たちの話を聞いたり農村でホームステイをした結果、今まで私が思っていた森林保護とタイでの森林保護が違うことにとても驚いた。大気汚染、資源不足などが森林保護に関わっていることを知っていたが、普段の生活で私が気をつけることはあまりないと考えていた。しかし、北タイの農村では、食材は山から採ってくるなど森林はその時の私たちにとって生きるために必要なものであった。木は切っても植えればまた生えてくるが、その間の食糧の調達はどうになってしまうのか。生活するための森林というのを始めて体感した。今まで、木は切っても植林すればよいのでは？と、考えていた私にとって、この2日間は衝撃的でとても良い時間になった。水道水は飲めなく、トイレもくみ取り式、シャワーは水しか出ずの生活でも、ホームステイ先にいる時間はとても幸せな時間だった。

それとは対照的に、勉強不足で後悔したこともあった。それは、バンコクでJICAの事務所に訪れた日、バンコクは町の灯りも綺麗で旅行者にとってとても素敵な土地だと最初は感じた。しかし、バンコクを実際に歩いてみて幸せな気持ちにはならなかった。野良犬たちは、農村の犬たちよりも汚く、橋の上で、赤ちゃんに乳を与えていたり橋の下では女の人が謎の店を開いていたり、一歩細い道に入れば廃墟らしきものが立っていたりと、歩いていて息苦しさを私は覚えた。人々は、このような状態なのにビルは高く町は明るくおかしくはないのか。帰ってきてから疑問がたくさん出てきてしまった。JICAが援助したという橋は、タイ人が設計したものなのか。それとも日本人が設計したものなのか。なぜ、三井住友が建設をしているのか。それによって、大きく異なるものがあると日本に帰ってきてから感じた。タイが設計図を持ってきて、「橋が作りたからお金を貸してはくれないか」と「橋がほしいので作ってはくれないか？」それとも、「ここに橋があったら便利だろうから、作ってあげよう！」いったいどれだったのか。私は、直接JICA、三井住友の人と話す機会があったというのに私は何をしていたのか。スタディツアーに行ったことで今まで考えたこともないことを考えさせられました。

I had a good time on the Study Tour. I'm deeply grateful for the family in the Hoipon community because the mother's cooking was very delicious. I don't like spicy food, but I was

able to eat her cooking without difficulty. I don't know why I was able to eat her spicy cooking.
Her food is the most delicious in all of Thailand.



スタディツアーに参加して

—タイでの2週間から得たもの—

松井 文香 (Ayaka MATSUI)

私は高校時代から発展途上国や異文化、青年海外協力隊などに興味があり、実際にどのようなものであるのかを自分の肌で感じ体験したいと思い、このスタディツアーへの参加を決めた。

実際に参加してみると、この2週間は日本では絶対経験できないことや見ることであり、現地ではできない貴重な体験の連続であった。出発前は、トイレで紙が使えないことや、家の中に虫などがいたらどうしようなどと村での生活に不安もあった。ところが、実際に現地に行ってみると、北タイの農村生活ではご飯は自分たちで食材となるものを見つけに行き、一から調理をするというような食材から調理まで全て自給自足で日本とは異なる自然環境であった。トイレやお風呂も日本とは異なり、懐中電灯を持って犬のしっぽを踏まないように歩き、家を出て外にあるトイレやお風呂へ行き、水しかないお風呂はまさに水浴びであった。日本人が毎日浴槽に温かいお湯をためてお風呂に入ることができたり、熱いシャワーを浴びることができるのはすごく贅沢で幸せなことだと実感できた。とても貴重な生活を体験できた。また村で私がホームステイでお世話になった家では、私と同じ年の女の子がいたが、同じ年とは思えないほどの自立した生活態度や親切さに感動した。また、近くの教会へ連れていってくれたり、短いホームステイではあったが仲良くなれて本当に嬉しかったし、彼女の立派さに圧倒された。ここでの村人たちは、パカニョー語を話す人たちであり、ホームステイをする前は言葉も分らないのにどうやって過ごしていけばいいのか、どう相手や自分の意思を理解したり伝えたりできるのだろうか、とても心配をしていたし、不安であった。しかし、ジェスチャーで伝えあったり、簡単な英語の文や単語を使ってコミュニケーションをとることができ、お互いの国の言葉が分らなくても、相手の意思を理解できたり、理解してもらえるのだと実感できたときは、本当に嬉しく思った。

また、コンケン大学の日本語を学んでいるという学生とも数日間交流し、お世話になった。彼女たちの日本語の流暢さだけではなく、分らない日本語があるとすぐに聞いてきたり、調べたりと日本語に対してものすごく熱心であり、最初から最後まで圧倒され続けた。交流のなかでは、タイと日本のイメージ交換をしたり、マーケットやショッピングセンター、有名なお寺などへ連れて行っていただいたが、コンケン大学の学生は何から何まで親切で色々と気にかけてくださり、すぐに打ち解け仲良くなることができた。

私は、今回のタイでのスタディツアーが初めての外国だったが、この2週間の1日1日が貴重なものとなり、タイで出会った多くの人たちからたくさんの良い刺激をいただ

くことができた。現地でタイ語は全く分からず苦労することもあったが、言葉だけがコミュニケーションのすべてではないと改めて実感することができた。しかし、その言葉というものが分かれば、もっと現地の方々のことを深く理解することができたり、また自分自身のことも伝えられるのではないかと思った。



Throughout this study tour in Thailand, I had a lot of experiences. For the first time, I went to a foreign country, did a home stay and interacted with students from outside Japan. There was a girl who was the same age as me that looked after me. She was kind and reliable, so I was not nervous and had a good home stay experience. The Thai university students were very kind and their Japanese was very good, so I was very impressed. Although I had a lot of concerns, I think that I experienced things that I cannot do in Japan, so I had a good two weeks.

タイでの 13 日間

泉 美憂 (Miyu IZUMI)

私は今回、13 日間という長いようで短い期間だったが、大学生活の中で良い思い出と良い経験ができたと思う。私がスタディツアーに行くに決心したのは、名古屋学院大学国際文化協力学科を選んだ決め手が、この学科にしかないスタディツアーだったからだ。最初はとても不安で心配なことばかりだったが、プレゼンテーションやミーティングを重ねていくうちに行きたいという気持ちが高まっていった。何故、タイに行きたかったのかというと、アジアに興味があったこともあるが、タイの今の生活やどんな問題を抱えているのかということにも興味があったからだ。出発当日の中部国際空港では、緊張と楽しみが交差していた。タイに着いた時は、興奮が止まらなかった反面、言語の違いというところで 13 日間が一気に不安になったことを今でも覚えている。

到着して 2 日目に、チェンマイの農村のホームステイをするという難題が待ち構えていた。家の滞在する数の関係で、17 人のうち 5 人が 1 人でホームステイをするというので、私はその 1 人に選ばれてしまい、不安が頭をよぎった。私の滞在した家は、村の中でも比較的英語は通じる場所だったので、その不安がなくなると思っていたが、案の定、ホームシックになってしまった。初日の夜は、蚊帳を用意してくれていたのに蚊帳の中で寝ていたが、蚊や蚊以外の虫に刺されることがとても怖くてなかなか眠れなかった。夜明けには、豚や鶏の鳴き声、犬の喧嘩の音が飛び交っていてうるさかった。私は、早くみんなに会いたくて一番に集合場所に走って行った。農村滞在 2 日目に、機織りや餅つきなど日本にいてもなかなか体験することのない体験をした。暑くてもどんなに汗をかいても、長そで長ズボンで虫に刺されないために防いだ。楽しいことは時間が経つのが早いというが、まさにこの日は時間の経過が早く感じた。夜になると不安が出てくる。しかし、それは最初だけで、別れの時にすごく心が痛くなるくらい寂しく感じた。ここでのホームステイでは、一生忘れられないほどの経験ができた。

次に飛行機を乗り継いでコンケンを訪れた。コンケンでは、コンケン大学の中を生徒たちに案内をされながら回り、たくさんの遊びをして交流し、楽しい時間を過ごした。コンケン大学の生徒たちとナイトマーケットという夜の市場に行き食事をしたり、おしゃべりをしたり、他にも違う市場にや巨大デパートに連れて行って買物をして楽しんだ。そんな楽しい時間もあっという間に過ぎていった。コンケン最終日には、晩ご飯にパーティーをした。その時のコンケン大学の生徒とは、今でも繋がっている。

最後に訪れたのが、タイの首都、バンコクである。バンコクのホテルはとてもきれいでこの 3 つの地域の中で一番過ごしやすいホテルだった。バンコクでは、主に JICA に訪問して人身売買や青年海外協力隊の話を聞いた。私は国際文化協力学科ということ

で、国際問題に関わった講義も受けているので為になることばかりだった。スラムにも訪問させてもらったが、今のタイのスラムの現状を間近で見て、私たちに何ができるのかやこの現状をどう世界に広めていくかを真剣に考えさせられた。

今回の 13 日間のスタディツアーで私はタイの今の深刻な問題やホームステイで学んだ昔からの暮らし方、文化について詳しく知ることができ、そして感じる事ができた期間だと私は思う。タイに行って 13 日間を過ごしてみて、いつもは大学で一緒にいなかった子や話したことがなかった子とも仲良くなることができて、困難も共に乗り越えらからこそ、絆を深めることができたのだと思う。もし、機会があるならタイだけでなく色々な国の現状を見て感じてみたいと思った。皆さんも是非行ってみてください。

I had a very good experience going on this study tour to Thailand and felt like I got to see a meaningful vision of the current state of Thailand. I met and became close friends with both people from Thailand as well as people from around the world. I made good use of the experience and we all enjoyed being involved as event volunteers.



コップンカァ!!

遠藤 奈々美 (Nanami ENDO)

「タイ語で“こんにちは”って何て言うの？」このセリフから始まった私のスタディツアー。高校2年生の時にインドネシアへ行き、“発展途上国”や“貧困国”というイメージが帰国した時にはガラッと変わっていたことが印象的で、特にタイは日本の多くの企業が進出している国でとても興味深かったことが、このスタディツアーに関わるきっかけとなった。しかし、事前学習で病気や国の情勢を学んでいくにつれ、日本との生活の違いを見て不安を抱き、イメージは悪くなっていく一方で「親に頼んでまでお金を出して行く価値はあるのだろうか。」と、何度も悩んだ。調べれば調べるほど環境の悪さは目立つし、まず自分がタイへ行って何を学びたいのかすら、明確にもなっていなかった。そんな、ぱっとしない心情のままに行ったスタディツアーだったが、今では一生忘れられないであろう素敵な経験になった。

タイと日本の違いは空港に着いて空気や環境、1番はトイレですぐ感じる事ができた。日本ならば私の街から1番身近であるセントレアでも、施設の設備はかなり良く、トイレもとてもキレイで居心地がよい場所である。ところが、タイで1番大きな空港と言われるところでトイレを利用したのだが、ドアを開けた瞬間から衝撃であった。便器の隣にはバケツが置いてあり、その中には使用済みのトイレットペーパーが溢れんばかりに押し詰められていた。そのかけらは床にも散乱し、例えば日本の公園のトイレといいところ勝負であろう。しかし、まだトイレットペーパーがあっただけでも幸せである。一般的にタイではトイレに入ったら、後始末は‘ふき取る’のではなく‘流す’のである。実際に、ホームステイ先の家庭にも便器の隣には水が満タンに入った桶やバケツなどが置いてあり、ペーパーが用意されている所は外国人観光客が多そうな施設やデパートぐらいである。その習慣からトイレの水圧は、日本の2分の1ぐらいとそこまで強くないため、使ったペーパーを流そうとするとトイレが詰まってしまうらしい。ましてや、ホームステイ先の便器には流すという機能すらなく、バケツの水をすくって流し込むという手動式であった。まさに、衝撃であった。

このように、生活や文化の違いを話せばきりが無いほど、沢山の違いを感じる事が出来た。

学習面ではたくさんのことを知り、たくさんのことを感じ、たくさんのことを学び、日常生活にたくさんの幸せを感じた13日間であった。初日に体験した農村ホームステイでは、人情の良さはもちろんのこと、弥生時代を感じるような生活、パカニョーの異

文化体験、自給自足の暮らしなど日本では絶対にできないと言っていいほど貴重な体験をすることができた。JICA 訪問では、日本人がタイにどのような支援を行っているのかを自分の目で学び、自分自身の進路に関しても考えることができた。スラム街を実際に歩くと、私たちには想像を絶するような景色があり、また、私たちが想像をしているような“スラム街”とは全く違った住民たちの笑顔があり、胸が痛むような背景もあった。現地で話を聞き、私たちが書面上、世間に認められた“国民”であることに幸せを感じ、“教育”を受けられていることにありがたみさえ感じるくらいであった。

そして、タイに行く前に何を学びに行くのか明確でなかった私のスタディツアーは、帰ってきたときには目一杯の知識を習得し、胸を張って「ただいま」を言うことができたものであった。帰国してから“モノ”に対する考え方は増して強くなり、自分で実感するほど変わったと思う面もでき、スタディツアーに行って本当によかったと思う。冒頭で述べた不安は、タイで過ごしている間に気づかないうちに消えていて、親に頼んでお金を出してもらうほど行く価値のあるものであった。自分自身、自信を持って成長できたと言えます。タイに行ってお世話になった方々、先生、親、今回行くことに携わった人みんなに、『コップンカア（ありがとう）』。



My image of Thailand has been changed by this study tour. You might have learned about some countries from your teachers, but you really should see the countries for yourself. This is very important because the image of the “foreign country” which you picture is only your imagination. This is what I realized after I experienced the country of Thailand for myself. Thus, I studied many things while staying in Thailand and continue to study about what I have learned from this study tour. I’m going to share this experience with other people who do not know about it. Thank you, Thailand (study tour). I’ll never forget the experience of this study tour.

目で見たタイの現状

熊谷 佳純 (Kasumi KUMAGAI)

8月18日から30日までの約2週間にわたり、私はタイでのスタディツアーに参加した。元々アメリカに3年半滞在していたが、日本以外のアジア圏にあまり行ったことがないため、今回のスタディツアーは私にとってとても新鮮だった。毎日違う場所に訪問し、タイの現状を自分の目に焼き付け、とても普段では味わえない経験をたくさんした。あっというまの2週間だったが、私の生き方を考えさせる貴重な2週間でもあった。

一番印象に残っているのは、最初に訪問したチェンマイにあるホイポン集落で3日間過ごしたことだ。ホイポン集落の人たちはみんな笑顔が素敵で裕福な暮らしではないが、だれ一人文句を言わず充実した毎日をすごしていた。私は、P.チャリヤーとP.ウィトゥン夫婦の家にホームステイさせてもらった。二人には6歳と10歳になる子供がおり、家族愛で満ち溢れていた。ホイポン集落の人たちの1日は早く、6時には各自仕事をしていた。子供たちも学校の準備をしつつ、ご飯を運ぶのを手伝ったりしていた。ご飯を食べ終わると、米の精米、機織りなどのパカニョー文化について学んだ。ホイポン集落のお風呂には電気がないため、暗くなる前にお風呂に入るのが普通であった。その後はごはんを食べ、テレビを観たり、子供たちと遊んで10時には就寝した。この3日間で私が学んだことは、みんなが仲良く協力しあって生きていることだ。ホイポン集落には、親戚が隣に住んでいるのも珍しくないため、隣人ととても仲が良かった。米の精米した時も、機織りした時も、教えてくれた人たちはみんな仲良さそうに話し合っていた。さらに、子供が親に何も言葉を発しなくても邪魔な袖をめくるなど気を利かせ合っていた。平等で平和で誰を見ても幸せそうに暮らしていたホイポン集落の人々からいい刺激を貰えた気がする。



その後、私たちはコンケン、そして首都バンコクを訪れた。首都バンコクはタイの経済成長が一目が分かるくらいビルが建ち並び自動車やバイクの量も前とは比べものにならない量であった。ホテル、ショッピングモールもたくさんあり、今までのタイでは見れないものを見せてくれた。見せてくれたのは建物だけではなく、貧富の差もよく

目に見えた。楽しそうに買い物袋をぶら下げている若者もいれば、道の横で寒そうに座っているホームレスも目に入った。どこの国でもあり得ることだが、ホイポン集落を訪れた後に見るととても心が痛む光景であった。なぜ同じタイなのにこんなにも違うのか。そしてどうしてこんなにも格差が生まれてしまうのか。貧富の差をなくすために私たちにできることは何だろうか。色々自分なりに考えるようになった。



今回タイでのスタディツアーから帰ってきて、みんな平等で暮らしていたホイポン集落とバンコクで目にした貧富の差を比べるようになった。その2つに限らず、同じ国なのにバンコクでは同じ場所で生きているのに、なぜこんなにも差がでてしまうのだろうか。貧富の差は解決されにくい問題の一つであるが、1秒でも早く少し

でも差が縮まるために自分ができることを考えていきたい。

I'm happy to have joined the Thailand Study Tour, which was really valuable for me. I had many unforgettable experiences such as the homestay in the village, communicating with non-English speakers, and visiting JICA's head office. I think I won't ever get over this experience. This tour made me deeply think about the gaps between the rich and the poor. Why are there so many gaps? Why can't they be more equal? Chiang Mai and Bangkok are in the same country. Bangkok should be more like Chiang Mai, especially the village where we visited. I think we need to take action to have more equality. We have to think about what we can do.

涙で始まり... 笑顔で終わる

黒川 さくら (Sakura KUROKAWA)

スタディツアーという東南アジアを中心とする独自のプログラムがこの学校にはあった。これは、わたしがこの学校を選んだ理由の一つである。なので、今回、タイへこのスタディツアーを通して行けたことがとにかく嬉しかった。2週間で3つの地域を訪れ、どこへ行っても充実したプログラムが構成されていた。



今回、わたしは出発前に体調を崩し、出発するまでに体調を整えることができなかった。周りに心配をかけ、迷惑をかけ、農村ホームステイというプログラムにも参加できなかった...。正直、とても心残りで悔しかったが、引率の方が別のプログラムを立ててくださり、みんなと別れた2日間、チェンマイ観光として多くのところを訪れた。

この心遣いに感謝でいっぱいだ。

コンケン大学に移動してからは、多くの学生の方と交流した。学生の方は、日本語がとても流暢で通じないときはほとんどなかった。たとえ通じないときでも、身振り手振りや相手の目を見てゆっくり説明すれば通じた。こういう時、コミュニケーションっていいなと感じる。言葉でもない、文字でもない、ちょっとした表情や身動き...伝えたいという思いがあれば通じるのだから。そして、コンケンを離れてからも Facebook や LINE といった電子機器で連絡を取り合っている。こういう出会いがあるから、外へ行くことをやめられない。

バンコクに移ってから、緊張が高まった。東京のような慣れない都会感... それに JICA へ訪れたり、スラム街へ行ったりするからだ。

JICA 訪問では、青年海外協力隊の方々のお話や人身売買について伺った。協力隊の方々の個性あふれるプレゼンや昼食時の会話には惹きつけられるものがあった。協力隊に選ばれるだけある素晴らしい方々を目の前にし、緊張よりもわくわく楽しか



った。その後、高校に招いてもらい高校生の活気あふれるおもてなしを受けた。おぼつかない日本語とわたしたちの身振り手振りでコミュニケーションをとった。とても楽しいひと時だった。

2 日目の JICA 訪問で、人身売買について話を伺った。事前にある程度調べてきたとはいえ、タイの現状を聞くと耳を塞ぎたくなった。日本も関わっているこの国際問題には、一人ひとりの自覚と、正しい認識が大事だということを教えていただいた。

スラム街の地域を訪れたとき、まず目に留まったのは衛生面だ。動物の皮膚病のような感じやごみの量と異臭。だが、そこにいる人は暖かく、子どもたちもまたキラキラしていた。なぜここが経済面や教育面で差別を受けなければならないのかわからないほどの暖かい人間味を感じた。

この2週間で、わたしの夢がいつそう強いものとなった。帰国してから、今自分ができること... 夢に向かって毎日を有意義に努力していくこと。これからも多くの場所で多くの経験をしたい。そして、今繋がっているこの手を決して離さず、つながり続けること。わたしはまた、帰っていききたい。

このスタディツアーに関わってくださった皆さま、たくさんのおもてなしをしてくださり感謝。



We went to Thailand and I had a good time. The people's warm kindness welcomed me and made me happy. The experience taught me about the warmth and kindness of people.

I met many people and saw many places. Every encounter is precious to me. Because of this experience, I decided not to give up on my dream, which is helping foreigners as a member of JICA.

Thank you for welcoming us kindly. I'll come back again someday.
Thank you very much.

バンコクで知った途上国

—厳しい生活の中で生きる人たち—

小林 千華 (Chika KOBAYASHI)

バンコクの道端で見かけた物乞いたち

スタディツアー最後の訪問先はバンコクだった。話しで聞いていた通り、バンコクは都会で、高層ビルや綺麗なデパートが多く立ち並び、たくさんの人や車が行き交う。日本でいう東京のような活気のある賑やかな街だった。街行く人も美しい身なりをし、外国人観光客も大勢見受けられた。そんな人々に交じり、目を置く人々がいた。「物乞い」だ。初めて出会った人は盲目のおじいさんであった。賑やかな大きな道の前方、たくさんのおじいさんの群れの真ん中から、ガヤガヤとした音楽と共にそのおじいさんは現れた。首に木製のステレオを掛け、目は閉じたまま、木の杖を突きながら歩いていた。お金を入れてもらうための缶も持っていた。私はひどく驚き、唖然とした。この都会的な街とのギャップがとても衝撃だった。約4日間のバンコク滞在で、このおじいさんの他にも幾人かの物乞いを見かけた。街の中央には大きな歩道橋があり、そこで見かけることが多かった。ピアノを吹く少女、生後間もない赤ん坊を抱く女性、手足がほとんどない青年、顔半分が溶けて無くなっている男性。一人一人にショックを受け、見慣れることはなかった。しかし、私は何となく違和感を持った。手足がほとんどない人間が歩道橋の上にいることと、顔半分が無い人の溶けてしまった部分が妙に綺麗なこと。夜、ホテルで私は自分のiPhoneを使い「物乞い」について検索した。そこには、“物乞いの多くはマフィアによって働かされている”、“物乞いの纏う怪我は意図的に傷つけられたもの”、“物乞いの得た金のほとんどはマフィアの元へ行く”と、書かれていた。信じられなかったが、ほぼ全てのサイトにそう書かれていたし、その翌日に訪れたJICAでの人身売買についてのお話でもそう伺った。私は初めて「人身売買」というものを自分の目で見たのだった。人が人を不当に商売道具にし、それをビジネスにしているという事実には大きなショックを受けた。マフィアという強暴な存在が、貧困層などの弱者を騙し、もしくは誘拐し、その人の意に反して働かせるという残酷さに愕然とした。血も涙もないとはまさにこのことだと思った。許せないと思った。しかし、私に彼らを救えるのかというと、私は何一つ出来ることはなく、ただ物乞いがビジネスとして成り立たないように彼らにお金を与えないことだけで、それは彼らを見て見ぬふりするだけなのだ。自分の無力さを感じた。だが、自分がこの目で見たことを周囲の人達に伝えようと思った。より多くの人に世界で起きている問題を知ってもらえば、少しずつ人々の「人身売買」への関心は深まり、目を向けてくれると思う。それはすごく小さな進歩にしかないだろうが、いつかは世界全体の意識が変わり、良い方向へ進むことを願いたい。

スラム街の子供たち

バンコク最大のスラム、クロントイスラムを訪れた。ここは、日雇いの湾岸労働者や麻薬中毒者が多く住み、夜になると麻薬の取引も行われているという。

少しだけ街の中を見学するべく、歩かせてもらった。スラム街は本当に家と家が密集しており、道のあちこちにもものすごい量のゴミが転がっていた。日本では見かけないような恐ろしい犬もあちらこちらにいた。独特の臭いもした。都心部の綺麗な街並みとのギャップが、まさに途上国と感じた。しかし、街の人々は、私たちが挨拶をすると笑顔で返してくれる。貧しい生活を強いられている人々の前に、裕福な日本人が現れることで、何か攻撃されるのではないかとばかり思っていたのに。少し歩いただけではあったが人々の優しさを感じた。

今回、私たちは、クロントイスラムの中にあるプラティーブ財団とそこが運営する幼稚園を訪問した。どんな子供だった？と聞かれたら、普通の子供だった。日本の子供と同じで、明るく活発で、とても元気のよい、純粋な可愛い子供であった。外で一緒に遊んだときも、すごく懐いてくれ本当に愛くるしかった。ただ一つ、日本の子供と違うのが環境だ。日本の子供と何一つ変わらなく見える子供たちの周りには、麻薬や酒・煙草、人身売買、そして酷い差別などたくさん問題がある。スラム街出身というだけで就職できないことが多いそう。子供たちに何も非はないのに、その子供たちの将来が生まれた土地とその環境に変えられてしまうことはすごく悲しい現状だ。子供たちの明るい未来のために、麻薬などの問題はもちろん、差別に対しても国には動いてもらいたい。出身地ではなくその人自身を見てくれる国造り、そして子供たちの周りから麻薬を無くし、貧困問題に対しても積極的に取り組んでほしい。

Life is ...

Each person in this world began the same when they were born, as a baby. After that, one's life changes depending on one's self. But for some people of the world, their life is changed by the condition of the place that they were born, such as poverty, human trafficking and terrible discrimination. I think these change life as well. Do you think so, too?



スラム街に暮らす子供と

人生の大きな糧

—自分自身の考え方や価値観の変化—

佐藤 杏樹 (Anju SATO)

タイでのスタディツアーは、私の価値観や性格など様々な面を変化させてくれた。また、海外に行ったことによって、日本はいかにも恵まれているのかということを経験した面を感じることができ、日本人としての誇りや自国愛がさらに一層深まったように思える。

スタディツアーで一番心に残っていることは、やはり農村ホームステイだ。家の床も竹の皮などのようなものが敷かれていたり、板と板もうまく組み合わさっておらず、隙間だらけなので用心して歩く必要性があった。また、トイレもお風呂もその水の色も、日本とはかけ離れていた。そして、蚊帳を付けて寝ないと、蚊に刺され「マラリア」などといった病気にかかる確率も上がる。言語もほとんどタイ語やパカニョー語しか通じず日本と全く違う環境の中で2泊3日寝泊まりし、様々な人と関わり、交流を深めていくということによって、自分自身にかなりの自信がつくことになった。さらに、たとえ言語が通じなくても一番大切なのは表情だということを肌で感じることもできた。笑顔でいるということや挨拶をするということは、相手に好印象を与えるし、生きていくうえでとても大切なことだと改めて感じさせられた。

そして、農村ホームステイ先でのお母さんは、私が忘れかけていたことをたくさん思い出させてくれた。一番印象に残っている出来事は「ホテルの値段はどのくらいするの？」という問いだ。実際に私は詳しくは知らなかったので「わからない」と答え、ホストマザーはしかめた顔で「なんで？」と私に問いかけた。そのやりとりで、かなり自分が恵まれている環境にいるということを実感し、当たり前になっていたことを改めてホストマザーのおかげで考えなおすことができた。また、その問いを問われたときに答えづらいよく自分でもわからないとても困惑した申し訳ないという気持ちにもなった。

農村ホームステイをして、その暮らしに憧れを持ったこともたくさんあった。それは、ご近所さんや村の住民が全員仲が良いことだ。私が、ホームステイをしていた家では、隣の家の子が頻繁に出入りしたり、ホストファザーは仕事帰りに隣の家に出向き、隣の家のお父さんととても仲良く話していた。タイと比べ日本は、隣やご近所と仲が良いところもあるけれども、ほとんどは「隣は隣」などとあまり関わりはなく壁があるように感じる。なので、私は気軽に隣の家に出向いたり、あまり隣人と隔たりのないタイの家庭にあこがれを抱いた。

日本とタイとの文化の違いの中で、ここを日本は直さなければならないと感じるとこ

るも多々感じるがあった。そのうちの一つは、タイ人は自分自身が苦しい裕福な暮らしをしていなくても、自ら進んで募金をしに行くということだ。さらに、少ない額ではなく、ある程度の額を募金しているということも、この目できちんと確かめてきた。わざわざ募金してと宣伝などをしなくても大抵の人はみんな募金をしに行くという社会現象になっているようだ。東日本大震災の時期とタイの大洪水が近い時期にあったようだが、タイ人の方はタイばかりに募金するということは一切なく、日本とタイ両方にかなりの額を募金していたそう。それに比べて日本は、第一に自国への募金額も明らかに少ないし、募金したとしてもスーパーマーケットなどの募金箱を見れば一目瞭然であるが、ほとんど少額しか入っていなかった。まず、募金を自発的にする人自体がとても少なく感じる。「外国人はお金を貯金する風習があまりなくてすぐにお金を使い、逆に、日本人は貯金をよくする」といろいろなところで耳にするが、その言葉を悪いように裏返してみると「日本人はケチ」や先ほどにも農村ホームステイでの隣人との関係について述べたように「他人は他人と区別をつけ他人へ対する思慮が少ない」ということなのだろうか。どれが正解なのかはわからないが、募金をするということはとても大切なことなので自発的にタイ人のように募金活動に努めていく日本になってくれれば良いと考えた。

私はタイへ行き、様々なことを学び、様々な人と友達になったことにより、より一層成長したと思う。これからはタイで学んだことを忘れずに精進し、「文房具をスラム街の人々に送る」という活動のように、人の役に立つには何をしたらよいのかを考え、行動していきたい。

I enjoyed the study tour and learned about language and culture. My goal is to get to know many foreigners. I want to travel to many countries. Thailand has a lot of cultures and many languages as well.

The farm village had very beautiful scenery and very kind people. Thailand has changed my way of thinking. This study tour was very exciting.



タイで得たもの

清水 佳奈 (Kana SHIMIZU)

初めてのタイ

途上国へ行くのは初めての経験だった。入学する前から、このスタディーツアーには是非参加したいと思っていて、今回参加した。タイは急激に発展が進み、途上国とは言われていてもあまり日本とは変わらないだろうという印象を持っていた。実際、バンコクの空港に着くと華やかで途上国とは感じなかった。しかし、到着してすぐにナイトマーケットへ行くと、日本とはまったく違う世界だった。あちこちに野良犬がうろうろして、車やバイクが猛スピードで走っていた。町を歩くだけでドキドキした。

農村ステイ

2日目からは北タイのホアファイ村に2泊3日のホームステイをした。英語も一切通じないため、農村へ行く前は不安でしかなかった。村の方々と夕食を作るディナープログラム。生きている鶏を殺し、羽をはぎ、内臓を取り除いて、大きな包丁で骨ごと切って調理する。山から食材を採って来て、村にあるものを使い料理をする。一方日本では、きれいに調理された鶏がスーパーにならんでいる。こんなにも苦労して料理を作ったことがない。鶏を一から調理することですべてきれいに食べてあげようと、命に感謝していただくことができた。他にも、伝統的な機織りや精米作業などを体験した。村の方々は丁寧に教えて下さった。体験中、村の方々の笑顔がとても印象的だった。私たちが、上手くできると精一杯の笑顔で褒めて下さったのがとても嬉しかった。また、近所付き合いが素敵だと感じた。日本では、マンションなどで隣に誰が住んでいるかも分からない状況だ。しかし、村では村全体が家族のようだった。子供が大きな声で騒いでも許し合える近所関係。ここでは、子どもは宝とされていて、誰の子なのか分からないほどみんなが子ども達を愛していると感じた。現在の日本では薄れてきている近所付き合い、日本人は見習うべきだと思った。便利な世の中が本当の幸せなのだろうか、考えさせられる2泊3日だった。

スラム街視察

タイは急激な発展が進み、首都バンコクでは、高層ビルが立ち並んでいる。五つ星ホテルが集まった景色は見事だった。しかし、高層ビルのふもとにはトタン屋根の並ぶスラム街が広がっている。私たちはクロントイスラムというスラム街を訪ねた。メディアでしか見たことがなかったスラム街、正直汚いという印象しか持つことができなかった。スラム内には、ゴミの臭いが広がり、溝に大量のゴミが放置したままであった。野良犬

はやせ細り、見たこともないような汚さだった。私たちが訪れたのはお昼頃だったのにも関わらず、成人の男性も家の前でうろうろしていた。学校に通うことができない子供たちの姿もあった。今の自分の生活では考えることの出来ない現状がここにはあった。スラム街視察後、近くにあるクロントイ幼稚園へ訪問した。給食もあり、とても綺麗な施設だった。スラム街に住む子供たちもここへ通っている。一緒にシャボン玉、折り紙、サッカー等して遊んだ。言葉は分からなくても、彼らに連れまわされながら楽しく交流した。子供たちの笑顔にスラム街で暮らしていることを感じさせなかった。子供の笑顔は世界共通だ。私は、その笑顔がなくならないために、彼らに勉強道具を送りたいと思った。郵便で送るのではなく、現地に自らの足で勉強道具を持ってもう一度訪ねたい。また、こういった現実が世界にはあるということを広めていきたい。自分が見たものを少しでも多くの人に伝えることだけでも、彼らのためになるのではないかと思う。

JICA 訪問の際に、ODA 建設橋の視察をした。日本の資金によって建設されている橋。渋滞緩和のためインフラ整備に励んでいるが、もっと見なければならぬ部分があるのではないかと少し疑問に感じた。日本で教室に座って講義を聞くだけでは、感じることをできない思いがたくさんあった。今回のスタディツアーで自分がどれだけ便利な世の中で暮らしているか分かった。そして、もっとアジアを知りたいと思えた。他のアジア圏へ自ら足を運びたい。



I had a wonderful time in Thailand throughout the twenty-days I was there, seeing a lot of things, and meeting many people on the trip, so I was surprised and happy. As you know, Thailand is a developing country. Some people are living in slums. We have to change their life circumstances. In the slums, children can't go to school, even though they want to learn.

I will study about developing countries and international cooperation, so I would like to visit many countries, and of course revisit Thailand, too. Thank you for everything.

Thailand

杉中 香月 (Katsuki SUGINAKA)

初めての海外

今回のスタディツアーが私にとって初めての海外だった。タイに行くまでの事前学習では狂犬病やデング熱など病気の話が多かったために不安しかなく、13 日間タイで楽しめるか心配だった。でも実際に行ってみて、不安はなくなって病気も気にせず 13 日間楽しむことができた。物価も安くて、ナイトマーケットではTシャツが 100 バーツ（日本円で 300 円）くらいばかりで最初驚くことばかりだった。食べ物は辛いものも多かったけど、とてもおいしくておなかいっぱい食べることができた。

初めてのホームステイ

タイに行って最初のプロジェクトが、ホアファイ村のホイボン集落での 2 泊 3 日のホームステイだった。初日は現地の方たちに作り方を教えてもらいながら夕食を作った。生きている鶏を一から調理してみて、自分は意外と怖がらずに調理することができることに気付いた。そのあとステイ先に行き、家族たちに本を見せながら自己紹介をした。私たちがホームステイしたホイボン集落では、トイレは水で流すだけでトイレットペーパーは自分たちで持って帰り、お風呂も水道水でお湯も出なくて最初は戸惑いばかりだった。でも家族も優しくしてくれて、三日目には家族の一員になれた気がして帰りたくないという気持ちのほうが大きかった。ホイボン村では時間はゆっくり過ぎていて、日本ではきっと経験できないような機織りをしたり玄米を機械を使わず体を使って白米にしたり、いろんな事を教えてもらった。私たちが日本でどれだけ恵まれた生活をしているか、今回のホームステイを通して初めて知ることができた。そして、現地の方



たちと言葉が通じなく苦労したけれど、ジェスチャーなど使えば会話することができ、自分も積極的に話しかけることができた。個人的にこの村に行って、今回お世話になった人たちにまた会いたいと思った。

コンケン大学の人たちとの交流

まず、コンケン大学に着いて驚いたことは敷地内の広さだった。自分たちの学校と比べられないほど広くて、病院やホテルがあったことには衝撃を受けた。コンケン大学の日本語学科の人たちとの交流では、自分たちが思っている以上に日本語が上手だったため、日本人の私より上手ではないかと思ってしまった。交流会をしてみると、彼らは日本語が話せるだけでなく漢字もカタカナもすらすら書けていた。日本の文化も詳しくて、この人たちは本当に日本のことを好きなのだなと思った。でも、そんな生徒たちは日本に来たことがない人のほうが多かったので、ぜひ日本に来て日本の文化に直に触れてほしいと思った。

バンコクにて

交通量が多くて道を渡るだけで引かれそうになったし、時間もかかった。信号はついているけど、信号無視する人が多く信号が青の時間も短いので走って渡るしかなかった。常にドキドキしながら外を歩いていた。大きなモールもあり、まるで日本にいる気分になれた。そこには日本人が経営しているラーメン屋さんがあり、そこで食べたラーメンはほんとに美味しくて今でも忘れられません。



I was in Thailand for 13 days. In Thailand, I was able to study something that I could not experience in Japan. For example, I was able to realize that we live a rich life in Japan. I wish to participate in the tour, if given the chance. I also want to get to know cultures that are different from Japanese culture. I was really glad to have participated in this study tour. Moreover, I would like to go abroad again. Thank you.

タイに行って感じたこと

富田 愛弥 (Aya TOMIDA)

今年の夏休みの8月18日～30日は、私にとって、とてもいい経験ができたし、自分がどれだけ裕福に暮らしているかが感じられた日であった。正直行く前は不安で、海外へ行くのは初めてではなかったけれども、事前に調べ学習で聞かされていた病気などにかからないか心配だった。実際行ってみると食べ物にハエがたかっていたり、日本で暮らしていたら絶対に経験できないことばかりだった。

2泊3日の農村ホームステイ

私が今回のスタディツアーでもっとも不安だったのがこのホームステイだった。私は2人で住んでいる家にお世話になった。タイ語はあいさつ程度しか分からず、最初ホームステイ先のお母さんとお父さんに会った時はなんて喋ればいいのか分からなかった。重たい空気が流れていたことを今でも思い出す。少し喋れる英語さえも通じないことが分かった時は、これから3日間大丈夫かなと本当に不安でいっぱいだった。私は友達と二人でホームステイしていたので、二人で相談しながら自分たちが持ってきた「旅の指さし会話帳」を使って会話をした。お母さんもお父さんもその指さし帳に興味津々で自分たちから積極的に質問したりして、自然と4人で笑いあっている姿があった。そこからとても1日が楽しくて仕方がなかった。夜は人生で初めての蚊帳で寝た。蚊帳の中に蛾がいて、友達と蚊帳の意味がないじゃんと言っていた。朝は豚と鶏の鳴き声が目覚ましだった。日本では嫌いだった虫は、タイに行ったら身近にすることが多くて気にならず、むしろ友達になった気分だった。お母さんが作ってくれたご飯はとても美味しくて、帰国した今でも忘れられない味であった。このホームステイが終わって村を出る時はもう不安などなかったし、むしろここにまだいたいという気持ちでいっぱいだった。またいつかお母さんとお父さんに会いに行きたいと思った。



ホームステイのお母さんとお父さんと

スラム街に行って

スラム街については、私が事前学習で調べたところだった。スラム街を見た時は、私は甘く見ていたなと思うほど深刻だった。日本でよく見かけるポイ捨てされたゴミなどはまだいい方だと感じてしまうようなほど、地面や溝などに落ちている大量のゴミ。ゴミ収集所のような場所だった。そんな中を裸足で駆け回る子供たちを見た時は驚きを隠せなかった。そんな子供たちを見ていたら、ここをなんとかして変えられないのかなと思った。世界にはそのような場所が沢山あると聞いたので、ボランティアなどに参加して少しでも安心して生活できる街にしたいなと思った。



スラム街の子供

It was a very good experience. The language barrier was difficult, but it was a very substantial tour. I had a kind host family. I want to see them again someday. When I saw the children's smiling faces, I thought that a smiling face is common throughout the world. I would like to go to Thailand again. Participating in this study tour was a good experience. Thank you.

微笑みの国を訪れて

中林 由紀香 (Yukika NAKABAYASHI)

今回、スタディツアーに参加したのは、国際ボランティアに興味があったことと、発展途上国であるタイの現状を自分の目で見てみたいと思ったからである。

私にとって、高校以来で二度目の海外であった。高校時代の修学旅行とは違い、蚊に刺されてデング熱に感染したらどうしよう、犬にかまれて狂犬病に感染したらどうしようという期待よりも不安でいっぱいだった。しかし、そんな不安も最初だけで、13日間を過ごしていくうちに自然と消えていき、帰国する頃にはまだタイにいたいと思うほど、タイでの生活は充実したものであった。

ホアファイ村での2泊3日の農村ホームステイ。ディナープログラムでは、村人と共に畑から食材を調達し、ディナーを作った。食材を調達するために畑に行ったときに、村の方が「ただ田んぼや畑を作るだけじゃなくて、田んぼの周りをスコップで掘って溝を作って行って、そこに水を流して魚を養殖するんだ」と話してくれたときは、夢を語ってくれているようでわくわくした。また、自給自足の生活がかっこよかった。村での生活は、ニワトリやブタの鳴き声で一日が始まる。日本で普通に生活していたら味わえない朝だ。食事はどれも辛く、量が多く、村の人はご飯をたくさん食べるようだ。お風呂はお湯ではなく、水だった。私たちが訪問したのは8月でタイも夏だったが、冬でも水を浴びていると思うと、日本での生活が快適なものだと感じた。また、日本よりも近所付き合いがよく、とても仲良し。そしてなにより笑顔がとても印象的だった。ブタなどの村で見かけた動物の鳴き真似をしていると、笑顔で真似し返してくれたり、タイ語を教えてくれたり、日本語を教えてあげたりとコミュニケーションがとれてよかった。

コンケン大学訪問。私は人見知りをしてしまう性格なので、最初は何を話したらいいんだろうと緊張していたが、私の身長は、コンケンの学生にも小さく見えたらしく「ゆきか、ちいさい」と言われ、悔しかったので「ゆきかはおおきい」と言い返していたら「おおきいゆきか」と呼ばれるようになり、すぐにいろんな学生と話すことができた。宿泊したコンケン大学の学生寮のすぐ隣のコンビニで、毎晩のようにコーラを買っていた。12パーツのコーラは日本円で約36円。ここで、タイの物価の安さに驚く。また、毎晩のようにナイトマーケットに出かけた。かわいいものを売っているお店がいっぱいで、自分たちで欲しい物を「Discount please」と値引き交渉するのも日本ではあまり味わえないもので新鮮だった。

The 13-day trip I spent in Thailand was a very significant experience. I was stimulated by new discoveries every day. In addition, I was able to broaden my perspective with this study tour. I thank the people whom I was able to meet. I am also thankful to have made new friends. I want to go to Thailand again. Until then, I hope all will be fine.



日本以外の国へ

羽渕 由美子 (Yumiko HABUCHI)

初めての海外

本当に楽しく、驚きの連続でもあった 13 日間。わたしにとって初めての海外ということもあり、スタディツアーに参加することを決める前はタイという国について名前くらいしか知らず、なんの知識もない状態だった。しかし、参加を決めてからは出発の日まで楽しみで待ちきれず、いろんなことを予想する日々だった。

楽しみではあったが、やはり不安もあり、日本食（味噌汁）も少々持参した。

苦手な英語で入国審査

タイに到着して最初に気づいたことは、日本語が見当たらない！ことだった。（当たり前だが）空港内にある表示は、タイ語、英語、中国語の順番で 3 カ国語のみ。入国審査自体も苦手な英語で、ほとんどコミュニケーション取れずじまい…。まだまだ日本語はマイナーな言語なのだと実感すると同時に、もっと英語を勉強しようと心に決めた。しかし、空港内にあった自動販売機には 7 カ国語の表記がしてあるものもあり、その中には、さすがの日本語も存在していた。

翌日、農村ホームステイへ

チェンマイから今回お世話になったホアファイ村までの移動手段は車。途中で休憩をはさみながら 3 時間ほどの距離だった。

村までの道のりでも気づいたことはたくさんあった。ラッシュの時間帯でなくてもバイクの数は断然多く、ヘルメットなしで 2～4 人乗りなど当たり前のようなようだった。道路は村までずっと安定して舗装されていたが、歩道や横断歩道はほとんど見られなかった。タイのように急激に発展すると社会福祉がおろそかになると NGO の木村さんから教わった。工業の発展などから「物を運ぶことだけ」を考え発展させるとこのようになる。要するに、小さな子供や足腰の弱いお年寄りなどは、車優先社会のタイでは道路を渡ることできない。

村での暮らし

村での生活は、日本の大正・昭和の時代をみているようだった。今のわたしたちの生活レベルよりは数段、衛生環境に劣る。不足しているものも多い。しかし、物に恵まれていなくても人間はみんな幸せそうで、助け合い暮らしていた。お互いを信用しあい、家に余所の家の人が勝手に入ってきても平気なようだった。余所や身内という概念が無

いのかもしれない。村はひとつの家族みたいだった。

それらと同じように動物もまた自由だった。村での初日、夕食として鶏を調理しているわたし達の近くをニワトリが当たり前のように歩いていたし、村に滞在している間はリードに繋がれた犬を1匹も見かけなかった。むしろ、首輪を付けている犬を見かけると「あの犬、首輪がついてる」と思うほどだった。タイに滞在している間、見かけた犬はほとんど首輪もしていなかった。飼っているからといって首輪をつけるなんて可哀想だ、ましてやヒモで繋ぐなんて。という考え方らしい。もちろんリードに繋がれていないせいで起こる、犬同士のケンカも何度か目撃した。

ホームステイ先のチューリップちゃんと

チェンマイからコンケンへ

コンケンではコンケン大学の人たちと交流した。わたし達のお世話をしてくれた学生さん達は、みんな想像以上に日本語を流暢に話していた。そのおかげで、コンケンに滞在している間わたし達は日本語を話して生活することができた。一緒に食事をとったり、ナイトマーケットに連れて行ってもらったり、1日中ショッピングをしたり...。滞在したのはたったの4泊という短い期間だったがすぐに仲良くなり、そして今でも交流は続いている。



このころから活動に支障がでるほどではない腹痛の日々が続いた。

コンケンからバンコクへ

バンコクは正直わたしの好きな場所ではなかった。「同じタイでも国が変わったように様子が違う」と事前に聞いていたが、本当にその通りだった。チェンマイやコンケンとは違い自然が少なく、車も人も多く、物価は高かった。日本でいう東京のような感じだったが、東京よりも汚く、貧富の差が如実に現れていた場所だと思う。

スラム街も実際に歩くことが出来た。足を踏み入れた途端から鼻にくる、強力な異臭。普通に呼吸をすると臭気にやられ、涙が出てきた。その原因は、スラムのどこを見ても目に入る大量のゴミ。スラムから出るゴミの量が膨大すぎて、回収が間に合わないという。そんな中でも、わたしたちの目の前を小さな子供たちが笑顔ではしゃぎまわっていた。ここにきて、持参しただけで結局必要無かったと思っていた味噌汁（6食分）に初

めて手を付け3日で完食するほど、急に日本が恋しくなった。

ふりかえり

初めての海外だったために目にするもの全てが新鮮で、毎日ワクワクしていた13日間だった。その反面、緊張することも多く、夜は布団に入るとすぐ眠れる毎日だった。今回のスタディツアーで他にもいろいろな国に行ってみたいと思うようになった。これからも様々な問題に目を向け、そしていくつになっても好奇心を忘れない人間になりたい。

I experienced a lot of different things in Thailand. For example, in the village they did all of the daily-life work themselves, such as killing chickens they would later eat. This was the first time in my life to see such things, so I was very impressed. Also, I went shopping with my friends and when I spoke Thai, the shop staff were able to understand me. This experience has made me want to take on more challenges for all of the things I want to do in the future.

発展途上国での生活

平井 希歩 (Kiho HIRAI)

私はこのスタディツアーで初めて海外に行った。初めての海外が発展途上国だったため少し不安だったのに、タイに行く前の事前学習で食あたりのことや病気のこと、すりなどの注意事項を聞かされたりしたため、余計に怖くなりやっていけるのかなと思い行くのが嫌になった事もあった。けれども、実際行ってみたらそんな不安は消えてしまいすごく楽しくて良い思い出になった。

ホームステイ

このスタディツアーの中で最も不安であったのも、一番印象に残ったのもホアファイ村でのホームステイである。なぜなら、このホームステイ先は北タイにある農村で、ちゃんとしたお風呂がなくトイレもティッシュやトイレットペーパーを流してはいけないと聞いていたからである。お風呂といってもお湯が出ないために使うのは冷たい水であり、夜に入るのは夏であっても寒かった。それに、明るい電気もないため1人で行動するのはとても怖かった。そして不安なのは食事でもある。ホームステイ先に行く前に食べていた料理はとても辛く、水が無いときついものであった。このホームステイ先での食事でも辛くて食べられないのではないかと思っていたのだけれども、お父さんが作ってくれる料理はどれもすごく美味しくて、友達と二人で感動していたのを覚えている。そのことが伝わったらしく、お父さんはすごく喜んでくれておかわりまで作ってくれた。タイに行ってこんなにおなかいっぱい食べられたのは初めてであった。そしてこの2泊3日で一番感じたことは、家族の温かさであった。お父さんやお母さん、子供たちが毎日楽しそうに生活している姿を見て、私たちからすればこんなにも不便な生活なのに、便利な電化製品やテレビやゲームなどが無くても家族みんなで話をしているときの楽しそうな表情や雰囲気、また言葉は通じなくてもジェスチャーや単語帳を使ってのやり取りで気持ちが伝わり、気付かないうちに不安は消えていて、楽しくてホームステイが終わって欲しくないとも思ったほどである。



ホアファイ村での生活（私たちのホストファミリー）

学んだこと

ホーステイだけでなく、スラム街に行って思った事も同じである。今私たちがどれだけ贅沢で幸せな生活をしているのか、改めて気付かされた。これだけ贅沢な暮らしをしていても、出てくるのは不満ばかりでもっと毎日の生活に感謝しながら生きていくべきだと思った。また、こういったタイの現状を知ったならば、自分たちには何が出来るのか、何をしたらこのような発展途上国を良くしていけるのかを考えなければいけない。今までは国際機関が何か活動してくれているんだなと他人事のように思っていたが、JICAなどを訪問して話を聞いてみて、私たちでも簡単に支援する事ができると知ってやりたいと思った。このことを少しでも国際関係や途上国に興味がある友達に教えてあげて、さらに支援してくれる人が増えてほしい。

The study tour was very exciting and it was a learning experience for me.

I have a strong impression of the smiles of the host family.

It was very fun and I love my host family!

I realized that we have a very luxurious life now in Japan.

Through this tour, I realized that we should consider what we could do for those who do not live in such luxurious conditions.

初めてのタイでの経験

藤井 紗希 (Saki FUJII)

今回のスタディツアーで多くのことを学べた。発展途上国の現状を自分の目で見て感じることができた。日本はどれほど裕福なのかを改めて思い知らされ、途上国の人に何か少しでもしてあげられることはないか、タイに行ってみ方が変わり、考え方が変わった。行くまではタイでの生活、何より食事面に対してとても不安だったが、タイでの13日間はとても充実したものとなった。

ホームステイ

3日間の村での生活を体験した。私たちが訪れたのは北タイに位置するホアファイ村。自給自足の生活をしていて、村人みんなで助け合って生活をしていた。小さい村だからこそ助け合うことが大切なのかなと思ったし、お互いが相手を思いやり大切にしている日本では感じられないことが多かった。自給自足の生活も桶で流すだけのトイレも、水しか出ないお風呂も。どれも経験したことがなく、最初は戸惑った。言葉の壁にぶつかり苦労したが、通じたときはすごく嬉しかった。

大学生との交流

コンケン大学の方たちと交流した。日本語を勉強しているのでとても上手で感動した。日本語をすごく勉強しているのだと思った。また授業では、コンケン大学で働いている日本人の篠原先生と高石先生のお話を聞いたうえで、学生とタイと日本のイメージなどを話し合った。この話し合いを通じて、相手が私が思っていた以上に日本のことを知っていて驚き、また私は思っていた以上にタイのことを知らなくて新たにタイのことを知ることができてよかった。高石先生が大切にしている4つのことがある。(1「やりたいと思ったことがある」まずはその気持ちを大切にすること。2次に目標設定をすること。3その目標に応じて計画を立てる。4最後に人とのつながりを大事にする)私も大切にしていこうと思った。タイに来て人とのつながりがほんとうに大切なのだと改めて考えさせられた。

JICA 訪問

バンコクで JICA を訪問した。人身取引は世界各地で行われており、日本も例外ではないという。強制労働や強制売春や偽装結婚。貧しい国からより豊かな国を目指しているが、貧しいだけで人身取引の対象となるわけではない。人身取引は深刻な人権侵害だが認定されなければ被害者ではない。人身取引の被害にあった女性のための施設があり平均年齢がなんと私と同じくらいの子たちばかりだったので驚いた。他の国から来ている人もいて、職業訓練など受けながら生活しているそう。被害を受けた人たちは「騙された自分が悪い」と思っていて、自分は被害者であると認識していないのだ。また繰

り返さないことが大きな課題となっているそうだが、戻ってきてしまう人もいるそうだ。なぜ自分が辛いのに繰り返すのだろうと思ったが、やはり金銭面で苦しくて手を出してしまう人がほとんどだそうだ。被害者数が減ることはこれからもないのだろうか。

プラティープ財団

私たちが今回訪れたクロントインスラムは、14万人が暮らしていてほとんどの人が農村から出てきた人。勉強がしにくい環境で、2人に1人が学校に通えていない。タイ各地に1万8千か所もスラムがあり、高速道路の下もスラムになっている。スラムの中でも貧富の差があり、麻薬に手を出したり子供が非行に走ったりする。外国からの労働者も多く60〜70家庭がカンボジアから来た人たちだ。スラムの人たちは住民票がないだけでなく、出生届を出していない子供たちも多いという。その為30パーツ医療が受けられなかったり、出生届がないと死んだときも火葬できない。スラムには犬が多くごみの処理など気になったが、バンコクから週に1回来るか来ないかだそうだ。ごみのおいで住民同士がけんかをするという。それにスラムに住んでいることによって就職ができない、学校に入れないなどの差別がある。そのため他の所に住民票を移したりする。なぜスラムに住んでいるだけで差別を受けなければならないのだろう。

今回の13日間で本当に多くのことを経験でき学ぶことができてスタディツアーに参加してよかったなと思った。途上国を自分の目で見て日本との違いを知ることができてよかった。これからの生活に生かしていけたらいい。

I was glad that I participated in this tour and was able to see the present conditions of Thailand with my own eyes. I thought about these things and was told about them as well. Can't we do something? I experienced something that I could never experience in Japan. I would like to share the merits of Thailand. I feel appreciative of Thailand. If there is another opportunity, I would like to go to Thailand again.



コンケン大学の学生と

初めてのタイを訪れて

古谷 優衣 (Yui FURUTANI)

初めてのタイ

今回初めてスタディツアーに参加した。海外で多くの日数を過ごすということは初めての経験であり、13日間のスケジュールは長いようでとても短いスケジュールに感じた。そして、飛行機の乗り換えから車で長距離走行、すべてにおいて新しい感覚であり新しい経験であった。

チャンマイ ホームステイ

一番心配で大変な思いをしたのは、旅先でのホームステイである。ホームステイの場所はチェンマイ空港から車で約三時間という道のりを経た山奥の田舎にある。そこは私たちが暮らしているような場所とは別世界で、自給自足の生活である。日本でいう昭和初期の時代にタイムスリップしたかのような人との暮らしであった。ホームステイ先はタイなのに、タイ語はあまり通じない。ジェスチャーと現地の「ご飯、お風呂」といった簡単な言葉だけ教えてもらい一人で家へ案内された。1日目は言葉も通じず、緊張と不安からお風呂へ行ってすぐに寝てしまった。お風呂と言っても私たちが想像するお風呂とは違い、大きな樽に水が入っており、その水を桶ですくって水を浴びるものだ。もちろんお湯はない。そしてトイレと同じ場所にあるため日本人は必ずためらうであろう。私はそこで日本の暮らしがどれだけ幸せに暮らせているのかすぐに気づかされた。

朝、5時くらいから6時にかけて現地のニワトリと豚が鳴き出す。漫画であるようなニワトリの鳴き声で目が覚めた。それからみんなのいる集合場所へ向かい、ハタ織りや餅つきを経験した。ハタ織りでは何本もの糸を絡め、とても頭を使う。簡単にはできない作業を現地の人たちは簡単にこなしていた。餅つきでは、日本では餅つきと言えば水をつけながら餅をつく。ところが、現地の餅つきは、スリごまのような粉で水を一切使わずに餅をついていた。完成した餅は砂糖につけて食べたが、日本のお餅よりもよりおいしく感じた。

ホームステイ先の村は、村に暮らしているみんなが1つの家族のような存在で子供も誰の子供なのかわからないほどにみんなで育てている。夜ベランダで座っていると、少しずつ現地の子供が遊びに来て5人の子達と一緒に遊んだ。誰の家とかは関係なく、村の人々が自由に出入りをしていた。村が一つの大家族のようで暖かい村であると思った。

村での生活は、家族愛というものをすごく実感することができた。男の人も女の人も関係なく家事をし、何より母に楽をさせてあげていた。私はそんな簡単な家族愛を当たり前のように思っていたので、気づかされるいい機会となった。

コンケン

チェンマイを出てコンケンへ向かった。コンケン空港ではコンケン大学の学生さんが迎えに来てくださった。ホテルに着くとチューターが付き、日本の学生2人とタイの学生2人で、4人で一つのチームを作った。4人での行動は多く、すごく親しくなることができた。タイ語が全く分からない私たちをタイ語と日本語で通訳してくれたり、タイの食文化や生活、恋愛話などもしてくれたりした。コンケン大学で日本語教員の方に話を聞いた。その時に言われた大切なことが5つある。1つ目はやろうと思ったことを大切に、2つ目は目標を設定する、3つ目は計画を立てる、4つ目は様々なことにチャレンジしてみる、5つ目は人とのつながりを大事にする。この5つが何よりも重要なことだとおっしゃっていた。なんでも出来ないとすぐに諦めてしまっていた私の心によく響いた。日本語教員の話聞いてからコンケン大学の学生さんたちとワールドカフェというゲームをした。「タイについて、日本について」と大きな画用紙に絵や文字を使って表し交流した。私たちが何気なく見ているアニメや漫画はタイの人たちにとって日本の文化と感じられるようで、私たちも日本は世界からこのような印象なのかと知ることができた。

コンケン大学の学生さんとの交流はすごくいい経験の一つで、3日間一緒にいるだけで離れたくなくなる。そんな気持ちになった。今でも Facebook などを通して時々連絡しあっている。

バンコク

バンコクではまず初めに JICA を訪れて青年海外協力隊の方の話を伺った。青年海外協力隊という言葉は聞いたことがあるが、どのようなことをするのか詳しくは知らなかった。しかし現地で働く方の話を聞きより興味がわき、知ることができた。それからバンコクではプラティープ財団の訪問およびスラム街の視察をした。スラム街は裕福な家庭はなく、ゴミの管理がされていないため辺りにゴミが落ちている。悪臭もあり、貧困の差を目の当たりにした。

改めて思ったこと

スタディツアーを通して、日本しか見えていなかった視野が世界に向けられたことにより、貧困の差であったり、文化に違いであったりと多くのことを知ることができた。そして今の日本の生活がどれほど幸せに暮らせているのかを改めて実感した。13日間のスタディツアーで多くの感動と多くの知識と多くの経験ができた。この体験は私の中で素晴らしい宝物だ。

I had a wonderful time in this study tour, and an unforgettable experience.

The schedule of 13 days seemed too short. The people of Thailand are very kind and the food is delicious. I will cherish this experience.



タイの学生との交流風景

スタディツアーで学んだこと

山口 莉穂 (Riho YAMAGUCHI)

今回のタイ・スタディツアーでは首都バンコク、チェンマイ、コンケンの3都市を訪れ、2週間で様々なことを学んだ。

チェンマイから2～3時間車で走ると2泊3日生活するホアファイ村に着いた。村では蚊による病気を防ぐため蚊帳が各家にあった。自然が豊富な村であったが、以前、政府によって森を伐採されたため、資源をととても大切にしていた。村では現地の方と一緒に食事を作ったり、異文化を体験した。村に着いた日には夜ご飯を作るためいくつかのグループに分かれた。庭で飼っている鶏を殺して調理したり、山に入って材料を探しに行っているグループもあった。村には日本のような便利さはなく大変だと感じた。ホームステイで私がお世話になった家は、両親と女の子2人の4人家族であった。私はタイ語が全く分からず、家族とコミュニケーションをとることに最初は戸惑い、ホームステイ先の子ともあまり話せなかった。しかし2日目になると、身振り手振りで自分の言いたいことを相手に伝えられるようになった。言語がわからない苦しさはありながらも楽しさを感じられた貴重なホームステイであった。

村の後に行ったコンケンでは、コンケン大学の日本語学科の方々にお世話になった。私はもう1人の名學生と2人のコンケン大生とともに行動した。コンケンに着いた1日目は、コンケン大生と会話が長続きしなかった。しかしコンケン大学の人が大学内を紹介してくださり、とても仲良くなれた。とても驚いたことは、コンケン大学の日本語学科の方々がきれいな日本語を話すことであった。コンケン大学の人々とは、「日本とは」といった質問に対しそれぞれが思う日本のイメージを紙に書いていくというゲームをした。そこでもコンケン大生が自分たちの母語のようにひらがなや漢字を書いて驚いた。コンケン大生との交流に加えて、コンケン大学で日本語教員として働いている方から実際に話を聞いて日本語教員とは何かを知り、興味がわいた。

チェンマイやコンケンとは異なり、人や物であふれているバンコクへは主に JICA についての話を聞きに行った。朝のものすごい渋滞の中、JICA のタイ事務所に行き青年海外協力隊の方々の話を聞いた。理学療法士や司書、人身売買に遭った人々のケアを行っている日本人の話を聞き、日本国外で実際に活躍していらっしゃる人々がいることを実感した。また日本の支援によって作られている橋を川下りをしながら見てきた。チャオプラヤ川を下りながら橋についての説明を実際に橋を作った企業から聞いたり、今も日本の企業の協力によって作られている橋を見ることができると、とても貴重な経験ができた。そしてこのスタディツアーで最も衝撃を受けたのはスラムであった。人や物にあふれ、豊かなイメージを強く持ったバンコクであるが、ショッピングセンターから

車で 20～30 分走ると東南アジア最大のスラムの 1 つであるクロントイスラムがある。スラムの奥へ歩いていくと、水は清潔ではなく生ごみが広がり、家もひしめき合っただけで快適だとは言えない光景が広がっていた。バンコクの観光地とはあまりにイメージが異なっていたため、写真を撮ることを忘れてしまうほどだった。スラム内は細い道が多く入り組んでいるため迷わないように前にいる人についていくので必死だった。スラムの中を見た後、スラムの子供たちが教育を受けられるように設立されたプラティープ財団の方に話を聞いた。スラムの子供たちの中には、親の仕事を手伝わないと生活していけないため学校に行けない子や麻薬などに手を出す子もいることを知った。スラム内の幼稚園に訪れた際、子供たちが笑顔で遊ぶ姿を見て、貧しい環境の中で生活しているとは思えなかった。

タイに行く前、事前学習で様々なことを学んだ。しかし、実際に現地に行ってみると、発展してきたタイの明るい部分と暗い部分をさらに知ることができた。今回のスタディツアーに参加してタイという国についてや国際協力についてより興味を持った。そして自分たちの生活がどれだけ恵まれているか実感し、様々な国が抱える問題を知り、自分にできることは何か考えていく必要があると思った。

This was my first visit time visiting Thailand. I got to know a lot of things about Thailand. I learned how there is a large gap between the rich and the poor people, but all of the people who I met in Thailand had a smile on their face. A smile is important simply because no words are necessary. I'll never forget these thirteen days. I am proud to have joined this program. I want to go to Thailand again. Thank you.



村での夕食



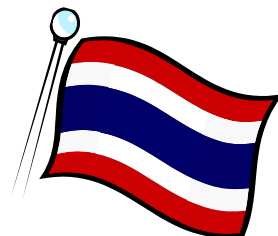
コンケン大学の学生

4. 報告会などの資料

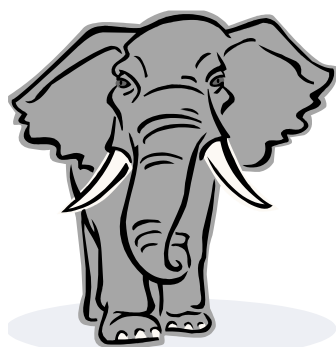




Thailand



スタディツアー報告会



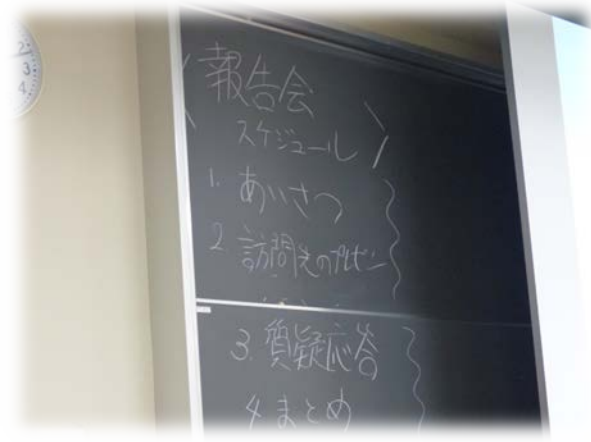
8月18日～30日の13日間に実施されたタイ・スタディツアー。国際文化協力学科生徒18名はタイのチェンマイ・コンケン・バンコクに訪問しました。そこで学んだ文化や伝統、貧富の差や人身取引問題などについて報告します。

日時＊10月23日(水) 1限 9:10～10:40

場所＊名古屋キャンパス 日比野学舎 301教室



スタディツアー 学習成果報告会



2013年10月23日（火）に、国際文化協力学科1年生のゼミの時間を利用して、スタディツアーに参加した学生たちによる学習成果報告会「タイ・スタディツアー報告会」を開催した。

報告会の概要

司会者の古谷による挨拶で報告会が始まり、各グループがパワーポイントを活用しながら、タイの歴史と文化、訪問先であるホアファイ村とLINK、コンケン大学、JICAと青年海外協力隊、都市スラムとプラティーブ財団で体験し、学習した成果を報告した。その後で、参加者一人ひとりが感想を述べ、報告会は無事に終了した。

報告会の際に、来場者の方にはアンケートにご協力いただいた。多かった意見には、「タイの料理がおいしそうなので、食べてみたい」「ホームステイでの生活が日本とは全く違うんだと思った」「近くの国で人身売買が行われていることが知れてよかった」などが見られ、興味や関心を持って聞いてもらったことが分かった。また、参考になる意見として「それぞれのプレゼンをもっと詳しく聞きたかった」「いいところばかりではなく批判的なところも聞きたかった」などの意見も寄せられた。全体的にみると、「途上国について詳しく知りたいと思った」「スタディツアーに参加したい」など、興味を

抱いてもらったような意見が数多くみられた。

当日は50名ほどの先生方や学生に来てもらうことができ、とてもよい報告会となった。改めて、感謝いたします。



ギャラリー



ホアファイ村での昼食



村人たちと機織り体験



ナイトバザール



不気味な食べ物



協力隊の方たちとハイチーズ



現地の学生たちの「ソーラン節」



バンコクの夜景



現地の生徒と記念撮影



ホームステイ先の親子



お寺の前でニコニコピース



クロントイ幼稚園児



円借款により建設された橋



J I C A 講 習 中



三井住友建設の方とフェリー



プ ラ ー タ ビ ア ン 作 り



北タイで活動する LINK さんと



ス ラ ム で の ご み 問 題



最後にみんなでコップンカー

編集後記

初めて、参加者全員が女性となったタイ・スタディツアー。事前授業では、インターネットを利用して初めてタイについて調べた人がほとんどだったと思います。何度も石崎先生や人見先生に助言をいただきながら作業を進めてきました。

実際にタイを訪れ、日本が行う国際協力、日本がタイとどう関わっているのか、また、開発途上という国の現状。実際に訪れたことにより、日本とタイのさまざまな面を一人ひとりが感じることができたと思います。

そのような貴重な体験を報告会やこの報告書を通して考え、振り返ることができました。一人ひとりどう感じたのか、ゆっくり見ていただけたら幸いです。

私たちのスタディツアーを色々な形で支えて下さった方々に感謝しています。

(黒川 さくら)

「タイ・スタディツアー報告書」

監修 人見 泰弘 (国際文化協力学科 講師)

編集 学生編集委員

編集委員長 黒川さくら

編集委員 長谷川由奈、泉美憂、遠藤奈々美、熊谷佳純、清水佳奈

英語監修 M.A. ダアノイ

発行 2014 年 2 月

発行機関 名古屋学院大学 国際センター

456-8612 愛知県名古屋市熱田区熱田西町 1-25

TEL 052-678-4093 / FAX 052-682-6824

Report on Study Tour to the Thailand 2013 organized by Department of International Culture and Cooperation, Faculty of Foreign Studies, Nagoya Gakuin University

Edited by Yasuhiro HITOMI, Ph.D.

February 2014

International Center, Nagoya Gakuin University

1-25, Atsuta Nishimachi, Atsuta-ku, Nagoya, Aichi, 456-8612 Japan

TEL +81-52-678-4093

